JOINT

トヨタ財団
広報誌［ジョイント］
January 2013

No.11

【特集】
これからのアジアと日本

本号では、アジアと日本の「来し方行く末」をアジア隣人プログラムの今後の方向性とともに考える特集の他、東北における助成プロジェクトの活動状況などを多面的に紹介。国と国、地域と地域、人と人の「新たなつながり」を求めて私たちの明日への旅は続きます。

公益財団法人 トヨタ財団会長
奥田 碩

2013年のご挨拶を申し上げます。

昨年は、ロンドン・オリンピックでの日本選手の活躍、山中伸弥教授のノーベル賞受賞など我が国にとっては、比較的明るい話題の多い一年でありました。

また、昨年は世界各地でリーダーの交代が行われた年でした。日本でも年末にかけて衆議院議員総選挙が行われ政権交代という結果となりました。しかし、震災復興、エネルギー政策、景気対策、社会保障等解決に時間のかかる課題も山積しているなか、新政権は重責を負うこととなります。

他国との関係に目を転じると、今や、世界的に人や資本の移動の制約が緩やかになり、情報が瞬時に世界中に広がって複合的な影響をもたらす状況のなか、各国とも所得分配、資源の配分など社会の不安定要素を解決するために適切な対応が必要です。それぞれの地域、国の抱える課題への取り組みがお互いに影響し合っており、先進国、途上国という単視眼的な思考では、解決策を見いだせない状況が続いております。国と国との関係について新たな段階を模索しなくてはいけない状況のなか、いかなる場合にも、現実的で公正な解決策を模索し、お互いに寛容な態度で臨むことが望まれます。

こうした、ますます多様化、複雑化する国際社会にあって、他の国々と解決すべき課題をともに認識、共有し合い、内外の諸課題への取り組みを展開していきたい、またそういった経験から互いが学び合うことも多いのではないかと思っております。トヨタ財団の助成活動も幅広い視野で、さまざまな課題への取り組みを支援してきておりますが、1974年の設立当時から、多元価値社会――多様な価値観を許容しあう社会――の可能性も追及してきたテーマの一つであります。またアジアにおいて隣国への理解をお互いに深める研究・活動への助成も行ってまいりました。

ともすれば内向きになりがちな世相のなかで、今後の社会を担っていく若い人たちには広く世界に目を向け、他国の人々と共に「より良い未来の構築」に向けて活動を進化させていってほしいと考えます。

トヨタ財団としては、限られた資金を有効に使い、民間財団の特色を活かした活動を継続し、社会に対し新たな提案を行うことができればと考える次第です。

本年もご指導、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

2013年元旦、山中湖にて
撮影：遠山敦子（トヨタ財団理事長）

JOINT

January 2013
No.11

Photo by Ken Aoo

今号の表紙写真は、2012年2月に、当財団プログラムオフィサーがミャンマー最大の都市ヤンゴンの市場で撮影した1枚。これまで外部に門戸を閉ざしてきたミャンマーが急激に変化するなかで、湧き立つような熱気が感じられたといいます。その反面、女性や子どもが顔に白い粉を塗る習慣も、あるいは数年のうちに消え去ってしまうかもしれないと思うと、そこには一抹の淋しさも……。

CONTENTS

FIRST WORD ◉ 奥田 碩
新年のご挨拶 …… 2

特集：これからのアジアと日本
アジアの中の日本――「新たなつながり」を求めて …… 4

アジア隣人プログラム 座談会
加藤剛 × 浅見靖仁 × 落合恵美子 × 清水展 × 桃木至朗
アジアの来し方 日本の行く末 …… 6

私たちの取り組み――アジア隣人プログラム助成対象者からの寄稿
2009年度助成対象◉ 中地重晴
マプタプット工業団地と住民の共存は可能か …… 12

アジア隣人プログラム特別企画「未来への展望」
助成する、されるの関係を越えた
パートナーシップと「知」の構築を …… 14

国内助成プログラム・アジア隣人プログラム・研究助成プログラム、他
2012プロジェクト一覧 …… 16

JOINTホット・インタビュー ◉ 金田諦應
話を聴くこと、自然を感じること、そして忘れないこと …… 20

EDITOR'S COLUMN
石巻でのある一日 …… 25

「私」のまなざし ❺ 宇田有三
ボジョーとの再会の約束 …… 26
～停戦から和平への道を探るビルマ

JOINT Café
第2回［秋田］スウィートマーケット …… 28

トヨタ財団ジャーナル …… 30
●アフリカにおけるアジアワークショップ ◉ 峯 陽一
●アジア隣人プログラム・研究助成プログラムの助成金贈呈式を開催
●東日本大震災対応「特定課題」<冬助成>の助成金贈呈式を開催
●子どもの居場所づくりと次世代の育成～2012年度 報告会を開催、他

【特集】これからのアジアと日本

アジアの中の日本――「新たなつながり」を求めて

◉青尾 謙（トヨタ財団国際支援グループ プログラムオフィサー）

東北とアジア

２０１１年３月の東日本大震災の後、私は震災関連の助成プログラムを兼任し、しばらく日本の東北地方とアジアを行き来することになりました。

東北からアジアに行くと感じるのは、「きっと明日は今日よりよくなる」という人々の確信のようなものでした。被災地の先が見えない状態と比べ、その明暗の差に痛みを感じつつ、でもアジアの明るさにどこかで救われるような思いでした。

ジャカルタには、眩しい色あいのコスチュームに身を包みながら震災被害者への義捐金を募る、インドネシアの若者の姿がありました。その風景を見たとき、「豊かな日本」が「貧しいアジア」を助けるという時代は終わったのかも知れない、と漠然と感じたのです。

トヨタ財団とアジア

トヨタ財団も１９７０年代以来、東南アジアを中心とする人文社会研究や翻訳出版を中心に国際助成を行ってきましたが、ここ数年（２００９―２０１１年度）は、「アジア隣人プログラム」として、アジアにおける課題解決をめざす実践型のプロジェクトに助成してきました。

２０１１年度までアジア隣人プログラムの選考委員長をおつとめいただいた白石隆先生（政策研究大学院大学学長、アジア経済研究所所長）は「かつて、トヨタ財団は『隣人を知ろう』[*1]という優れたプログラムを行った。その隣人たちの関係が発展して、今度は『一緒に何かをやろう』という関係になるとよい」と言われました。そのための前提となるのは、日本とアジアが真に対等な隣人としての関係を築くことです。

私には、今のアジアの変化は、ようやく日本が「アジアの中の日本」に戻り、本当の隣人としての「新たなつながり」を築くことのできる条件を整えてくれているのではないか、と思われます。どうやってそのような新たなつながりを結ぶことができるかが、日本にとっても、トヨタ財団にとっても今後の大きな宿題です。

これからの国際助成

現在トヨタ財団は、これまで国際助成として培ってきた豊かな土壌をもとに、新しい時代にあった事業のありかたを考えようとしているところです。その見直しのために、日本や各国の政府・国際機関、助成財団、ＮＧＯ等の実務者、研究者等を訪問し、広汎なヒアリングを行っています。そこで聞いたのは「東南アジアで開発援助の時代は終わった」、「既に日本がアジアより『進んでいる』時代は終わった」という、衝撃的ともいえる現場の感覚と、「こんな時代だからこそ、トヨタ財団には『よそができないこと』をやってほしい」という期待の声でした。

新たなプログラムを立ち上げるための移行期として、２０１２年度にはアジア隣人プログラム特別企画『未来への展望』を実施しました。これは、アジア各地で活動してきた日本の国際協力ＮＧＯを中心に、19の団体やネットワークから、これまでの活動の振り返りを行い、将来の日本並びにアジア各国の社会に必要なものを提言していただくためのものです。この報告により、これまで異なる文化や風土の中で地道な活動を続けてこられた方々からの、貴重な提言が得られるものと期待しています（関連記事は14ページ参照）。

さらにこれまでの助成対象者の中から、各プロジェクトから得られた知見を、社会に向けて広く発信するための、国際シンポジウムの開催への助成も行っています。

こうした助成の成果の蓄積も今後の助成活動に活かしていきたいと考えています。

新たな一歩のために

今回、こうした一連の国際助成の見直しに向けた活動の一環として、改めて今後の視座や方向性を探るために東南アジア各国を専門とする研究者による座談会を開催しました。

長きにわたって東南アジアの各地で調査を行ってきた方々、アジア各国の家族の変容や意識のありようの比較研究をしている方、など5名に参加していただきました。それぞれの経験からこの40年間の東南アジア、日本、そして両者の関係の変化を振り返り、さらには、今後10年、20年先の展望について議論していただくことを目的として開催したものです。かつて、当財団の国際助成の選考に携わった方にもご参加いただき、東南アジア地域にトヨタ財団が果たしてきた役割と今後果たすべき役割についても触れていただきました。

当日は、財団側からも常務理事の伊藤と私が参加し、担当者がアジア各地でみてきた助成プロジェクトの状況などを踏まえた現在の問題意識についても共有し、忌憚のないご意見をいただきました。

フリー・ディスカッションのスタイルで行われた議論は、政治・経済、歴史・文化全般へとひろがり、アジアと日本の社会変化と国による違い、そしてトヨタ財団に対する率直なご意見等、大変実り多いものとなりました。次ページからその一部をご紹介したいと思います。誌面の都合もあり、多岐にわたり長時間におよんだそれらの議論のうち、アジアと日本、そしてその関係のあり方を考えるうえで、基本認識として必要と思われる部分を抜粋して掲載いたします。議論のうちのほんの一部とはいえ、アジアの今を理解するうえで、読者のみなさまのご参考になれば幸いです。

＊1：アジア各国の書籍を日本語や各国語に翻訳して出版することにより、アジア各国間の相互理解を促進しようとするトヨタ財団の助成プログラム（１９７８年～２００３年）

【特集】これからのアジアと日本

アジア隣人プログラム 座談会

加藤剛（座長）×浅見靖仁×落合恵美子×清水展×桃木至朗

（トヨタ財団／伊藤博士、青尾謙）

アジアの来し方 日本の行く末

トヨタ財団設立40周年を来年にひかえ、この間にアジアはどのように変貌してきたか。日本はこれからどう変わっていくべきなのか。アジアと日本の関係を軸に語り合われたフリーディスカッションの一部をここに採録。

アジアはどう変わってきたか

加藤　トヨタ財団が設立されてから40年近くがたつなかで、アジアと日本はどう変わってきたか。また今後10年、20年、日本とアジアはどう変わっていくのか。日本とアジアの関係はどうあったらいいのかということを、個人の体験などをまじえて自由にお話いただきたい。

清水　ぼくがフィリピンにはじめて行ったのが35年前。1970年代の終わりです。最初のころは、大金持ちと貧乏人という二極分化の社会だったのが、80年代以降、マニラや地方都市でショッピングモールが次々建てられて、そこで買い物したり、レストランで外食したりする層が増えてきた。

日本は、ずっと以前には総中流化、一億総中間層とかいわれていたのが、逆にこのところ階層分化がすすんできて、ワーキングプアの問題が深刻になっています。一方でフィリピンは、大多数の貧困層と上澄みのように層の薄い金持ちだけだったところに、中間層が増えてきたわけです。この現象は東南アジア全体にいえることだと思います。

フィリピンでは例外的に海外出稼ぎで稼いだお金が還流して経済の発展を支えていますけど、タイやマレーシアでは1985年のプラザ合意による円高もあって、日本の企業が進出していったことが一番大きな理由だと思います。80年代後半からの発展は日本の企業が支えたんです。そして今では、東南アジア全体がかつての高度経済成長期後の日本のように中間層が増えてきた。同時に、東南アジアにおける経済発展と中間層の創出に大きな役割を果たしてきた日本の企業の存在感が、希薄になってきています。今は韓国のコミュニティがすごく存在感があります。ぼくは焼肉が大好きなので（笑）、実感できるんです。

加藤　ぼくがインドネシアにはじめて行ったのは1971年の暮れです。貧しいなということと、インフラの整備が遅れているなというのが圧倒的な第一印象。しかし、その後の日本の経済進出もあり、80年代の末くらいからずいぶん変わってきた。今はタクシーに乗ると必ず韓国から来たのかと聞かれますが。

このごろは、インドネシアに行くとよく電気製品を見るようにしているんです。どこのブランドかなと。古い電気製品は日本のメーカーが多いけど、最近新しく買い替えたものはほとんど全部が韓国製品。インドネシアの経済発展が非常にめざましいということと、日本のプレゼンスがどんどん低下して、清水さんのおっしゃるように韓国のプレゼンスがあがっているなというのが近年の印象ですね。

落合　1980年に東南アジアへはじめて行きました。その時、ある村落の調査に行ったら、人々はみんな川で水浴びしていましたよ。その村を3、4年前に再訪したんです。そしたらホテイアオイがいっぱい川を覆ってしまっていて船にも乗れないし、水浴びする人なんて誰もいないといわれました。ここで以前、村人と水浴びしたことがあるって話したら、私はもうすっかり古老の扱いです。アジアでは、あっという間に古老化しちゃうんですね。すごく変化が激しいことと、若い世代が過去のことを知らない、知る気もない。もうすっかり中産階級っていう気分なんです。

あと私が感じているのは、女性の地位というか役割が微妙に変わってきているなということです。最初に行った頃は、女性がよく働くのがアジアだなという印象だった。じっさい、それは労働力率が裏づけている。今は、総主婦化というのは大袈裟ですが、労働するよりも主婦になるのが素敵なんだという価値観が出てきている。中産階級の誕生と関係のあることと思うのですが、でも一方で、じっさいにすごく女性が社会で活躍する状況もあって、アジアは同じ足並みで同じ方向にはいかないんだなと思っています。だから、一概にこの状況は日本の何年前だとかはいえなくて。異なる時代の変化と速度のなかで、日本やヨーロッパで起きたことが同じように起きている。韓国ソウル大学の張慶燮（チャン・キョンスプ）がいっていた「コンプレスト・モダニティ（圧縮された近代）*」という概念とも関連することかもしれませんが。

浅見　私が最初にタイに行ったのは81年、フィリピンには82年です。

アジアがどう変わったかというと、国によってかなり違う。たとえば80年代はじめには、タイもフィリピンも、車は年に10万台弱しか売れませんでした。しかしタイでは今、年間100万台近くが売れています。でもフィリピンはタイより人口が多いのに、今でも15万台ぐらいしか売れない。80年代はじめと比べれば、フィリピンでも中間層が増えてはいますが、タイと比べると、あまり増えていることにはならない。中間層の増え方も、中間層の意識も国によってかなり違います。

「民主化」もアジアに大きな変化をもたらしましたが、その変化も国によってかなり違いがあります。タイは9年前に失業保険を導入しましたが、フィリピンにはまだ失業保険がありません。

桃木　ベトナムは、来年（2013年）日越国交樹立40周年です。この40年の変化を一言でいうと、社会主義は遠くになりにけりということですね。40年前の共産党系、社会党系の人だけがベトナムと付き合っていた状態と、今はまったく逆になったといえます。私が留学した当時は、ソ連製の冷蔵庫とかクーラーが使われていて、それが何回か行っているうちに日本製に変わり、そして今は韓国製。40年の間にずいぶん変わってきた。

そしてそのことと関連して、にわかにこの40年のうちに、ベトナムだけではなく、どこもみんな欧米以外の国に関心を持ち始めた。これまでは、まわりの同じアジアの国々のことをあまりに知らなかった。ところが80年代後半からいたるところが変わってきた。たとえばタイの研究者がベトナムの研究をはじめたりとか、どんどんそういうことが出てくるようになった。あるいは、このごろ日本の西洋史の教授が韓国や中国、東南アジアによく行っている。自分の国以外のアジアの国に関心をもちはじめたんです。

変わらない日本の自己認識

青尾　アジアから見て日本が変わってきたなと感じられる点は何か。あるいは、アジアの

◉加藤剛（かとう・つよし）
総合地球環境学研究所客員教授、京都大学名誉教授。インドネシア・マレーシア社会学が専門。近年は日本のニューカマー外国人問題、シンガポール等にも興味。主著に『時間の旅、空間の旅――インドネシア未完成紀行』（めこん）など。過去にトヨタ財団国際助成選考委員を務める。

＊本来要するプロセスを極端に圧縮して、短期間に達成される近代化のこと。

人の日本を見る目が変わってきたなと思われるところがあるとしたら、それはどういうところでしょう。

落合　日本はどこが変わったかというご質問ですが、どっちかというと私には日本は変わっていないという印象の方が強い。現実的には階層化が進んでいたりとかっていう、変化はあるのですが、日本は現実を見る目や自己認識が変わってないなぁ、世界を見る枠組みが刷新されていないなぁと感じてしまうのです。

　アジアの自分のまわりの国への関心が出てきたというお話がありましたが、猪口孝さんたちがやっているアジア・バロメーター調査で「自分の国はアジアだと思うか？」という質問に対して、「そうだ」と答えるのはASEANの国々と韓国。日本と中国とインドは、自分はアジアだと思っていないんですね。自分の国としてのアイデンティティ意識が強いんです。中国やインドのような大国がそうなのはともかく、日本もそうなんですよ。

　また最近、EASS (East Asian Social Survey)の調査で「アジアの他国の人が職場で同僚になったら嫌か」と「親族に入ったら嫌か」という項目があって、一番嫌がっているのが中国人なんですね。日本嫌いはともかく、外国人一般が苦手というあたり、やっぱり中国は浮いているなと思いました。韓国とか台湾がグローバル化していて他のアジアの国々に関心を持っているのに、中国と日本が関心を持っていない。

　アジアが貧しくて、その底上げに貢献するのが重要な日本の立場だった時代があったと思うんですが、そういう時代はもう過去のものでしょう。今は日本が「ガラパゴス」をやめる、そのためにも東南アジアと一緒に何ができるかを考える、そういう枠組みに変わってきていると思います。そのことに相変わらず日本は気づこうとしていない。

浅見　日本では、日本人が一丸となって経済成長を達成したという成功体験を多くの人が共有しています。でもタイでは、かなりの高度成長が続いたのに、それを国民が一丸になって達成したという感覚をあまり抱いていない。日本だったら海外で日本車が売れていると聞いたら、サッカーのワールドカップで日本代表が勝つのを応援するのと同じ感覚で喜ぶわけです。タイも最近は自動車を輸出しているのは日本企業といっていますが、輸出しているのは日本企業ということもあって、国民全体がそれを喜ぶということはない。タイでは経済成長が、国民全体が共有できるナショナルストーリーになっていないのです。所得が増えた人がいるというだけです。逆にいうと、日本は、経済成長以外に誇るものはほとんどないし、成功したと思っているからあまり何も変えたくない。

加藤　でも、そういうなら世界中みんな同じような状況じゃないですか。今、どこを見渡しても誇りをもてるストーリーを描ける国なんてほとんどないですよね。

ナショナルヒストリーを超えたストーリー？

浅見　そうなると気になるのが、ナショナリズムですね。日本でも領土問題の影響もあって、隣国を蔑視することによって国民の誇りを取り戻そうという動きがみられますが、タイでもカンボジアとの国境紛争が一時そういう方向に行きかけました。何もほかにストーリーを描けないと、隣国蔑視型のナショナリズムに走る危険性はどの国にもある。

青尾　ナショナルヒストリーを超えたものとして、ASEANがEUのように一つのストーリーになりうるかという状況でしょうか。

落合　アジアで難しいのはさっきのコンプレスト・モダニティですが、それぞれがそれぞれの仕方でコンプレスト、あるいはショートカットしていて異なっているから、違う夢を見ていたりしていて、共通の物語がつくりにくいんですね。でも、かといって、なんでも共通の物語ができればいいかというとそうも簡単に言い切れなくて、物語をつくろうとすると逆オリエンタリズムみたいなことにもなりかねない。アジアが共通のアイデンティティを持てればいいという単純な話ではないと思います。

◉**落合恵美子（おちあい・えみこ）**
京都大学大学院文学研究科教授。歴史社会学・比較社会学。もともとは日本社会における家族の変遷等が専門だったが、近年は国際比較による価値観や社会のあり方に軸足を移している。主著に『21世紀家族へ――家族の戦後体制の見かた・超えかた』（有斐閣）、『アジア女性と親密性の労働』（共編著・京都大学学術出版会）など。

浅見　しかし、コンプレスト・モダニティがある意味ASEANの強みかもしれませんよ。自分たちはコンプレストしていないモダニティをもっているんだなんて思っているのは、逆に鼻持ちならないじゃないですか。ASEANなんかは、アジアのなかでもインドや中国みたいな〝深淵な〟思想がないから、モダニティのあり方にこだわらない。それが強みになるんじゃないか。変なナショナル・プライドがないのがASEANの利点になりうる。

　ASEANは会議ばっかりやっているっていわれていますけど、顔を合わせること自体に意味があるんです。日本もたまに参加しますが、完全に浮いちゃう。しかもASEAN同士で集まると、そこに上下関係なんてない。経済的には差がありますけど、フィリピンの人なんて、国は貧乏だけどそんなの俺には関係ないって感じで、対等にやっていますよ。本当に、頻繁に会っているんですね。ASEAN全体でみれば所詮エリートの集まりなんですけど、日本はそんな集まりさえももっていない。

加藤　あれは家族もつれていって、みんな一緒に集まってやるんでしょ。

清水　しょっちゅう会って、何かその場で決めるということではなくても集まって仲良くしている。もともとそれが大事な社会。そのネットワークのなかで、大事な時にはちゃんといろいろなことを決めていける。もともともっているコネクションによる社会のつきあいが、ASEANの共同性をつくっていくうえで効いているんですよ。ASEANの国々は、日本のように自己努力によって近代化を進めたというより、いろいろな外部要因に強要されて爆発的に進んで状況が転がっていった。そこを支えるためのナショナル・アイデンティティの具体的な根拠が弱いんです。それがかえって幸いしているようなところがある。

東南アジアと中国、そして日本の将来

加藤　友達や仲間をつくるということでいえば、日本のことを知ってもらうとか、これからの良い関係をつくっていく、あるいは親日派をつくっていくにはどういうことをしたらいいかが、重要な課題だと思うのですが。

清水　ちょっと端折っていうと、日本は東アジアより東南アジアと仲良くしやすい状況があるんじゃないかなと思います。一番仲良くしなきゃいけないお隣さんは韓国や中国、台湾ですが、リアルポリティクスとして仲良くするために、発展する中国に身も心も私たち日本の将来を捧げます、という風にはやっぱりならないでしょう。

　東南アジアという地域は、政治・経済の大きな枠組みのなかで浮き沈みしてきたけど、今また東南アジアがASEANとしてまとまって、重要な政治経済や文化のプレイヤーになってきたという風に思うんです。とくに大陸部はかつてのインドチャイナという言葉が示すように、インドと中国の間の回廊であったり、媒介する領域であった。そういう役割をもって、台頭するインドと中国のバランサーになったりしてうまく両端を結び付けて、アジア全体のキャスティングボードを握るというか……。経済的、政治的、軍事的な実力が小さい割には大きな役割を示すようになってくるだろうなという、確信に近い予感があるんです。あまり根拠のない確信かもしれないけど。

加藤　いや、かなり根拠はあると思いますよ。しかし、日本にとって東南アジアが重要だっていうのはわかっても、東南アジアにとって日本は重要かというと、それはどうなんでしょう。日本の政治的、経済的な発言力が弱くなっている気がするのだけれど。

桃木　私も客観的には清水さんがおっしゃる通りだと思うのですが、日本はそういうたくさんの仲間とマルチに手を組んで、荒れる海を泳ぎまわるということを考えたことがないんですね、江戸時代以降。だからいま、選択肢として中国に身も心も捧げるか、逆に中国とけんかするかどっちかしかないという情勢

◉**浅見靖仁（あさみ・やすひと）**
一橋大学大学院社会学科教授。タイ政治経済学が専門。ODAやNGOにも造詣が深い。主著に『東アジア政治のダイナミズム』（共著・青木書店）、『東南アジア・南アジア：地域自立の模索と葛藤』（共著・大月書店）など。

なんです。これは本当に困ったことです。超大国のどっちにつくかというのを考えるのが日本は好きで、東南アジアみたいな小さい国の集まりを最初から眼中に入れない人がすごく多いという風に、私は悲観しているんです。

加藤　なかなか楽観的な視点が出てこない？

桃木　そうなんです、なかなか楽観的なシナリオが描けないのです。しかし、中国、韓国、日本の歴史を掘り返せばいくらでも対立点が出てくるけど、それはフランスとドイツだって同じことであって、逆に三国間でうまくやっていた歴史だって過去にいっぱいある。ただ、自国のナショナルヒストリーを近代以降お互いがつくっちゃっているから、それが見えなくなっているんですよ。

ですから、今までと違った視点で歴史を研究し教えることで、可能性はまだたくさんあるという風に思うのが、あまり楽観はできないにしろ、ひとつの希望ではあるんです。

浅見　楽観的かどうかというのは、どれくらい自分に期待するかにもよります。楽観的になれないのは日本の将来だけじゃなくて、私の将来もそうですよ（笑）。年をとると筋力は衰えるし、徹夜すると次の日は疲れる。髪の毛は薄くなるし、ほぼ何もいいことないです。でも、じゃあお先真っ暗かといわれれば、そうでもない。昔と同じスピードでは走れないですから、フルマラソンを完走するのに4時間切らなかったら恥だとか思っていたらどんどんキツく、気持ちも暗くなります。でも、60歳近くにもなったら7〜8時間かかってもいいじゃないかと思えば、完走できるだけでもうれしいものです。

よく日本は小さい国だという、タイ人とかきょとんとしますよね。少子高齢化が進んでいるといっても人口は1億を越えていて、ヨーロッパのどの国よりも多い。これからGDPは減る一方だと思いますけど、たぶんフィリピンくらいにはなれる。フィリピンみたいな感じでほかのアジアの国々と付き合えばいいんじゃないですか。

何をいいたかったかといいますと、言い方が難しいのですが、つまり日本もそろそろ老い支度をするかどうかだと思うんです。国の「体力」の程度は分野によっても違いはあると思いますが、どっちにしろ、このあたりである程度は腹をくくらないといけないんじゃないかな。

加藤　人口予測でも、あと20〜30年すれば日本は1億人切って9000万人とか8000万人になるといわれています。また、2050年にGDPが韓国の半分になるとニュースで報じられたりする。今までのバイラテラル中心でやってきた外交を、体勢変換というか考え方を変えて、マルチラテラルにするためには今みなさんがいわれたことを認識しなきゃいけない。だけど、なかなかそれができないんですね。

浅見　国レベルでの老い支度という観点からも、マルチラテラルでいくべきでしょうね。近所の中の特定の家だけに向き合うのではなく、近所全体とのつきあいをこまめにしっかりやっていくという感じでしょうか。

加藤　そして、中大国であるというね——。大国でもない、小国でもない、日本なりに中大国としての認識、自覚。

浅見　中国みたいな大国じゃなくて、中国（ちゅうこく）でいいんじゃないですか。

加藤　そうですね、中国（ちゅうこく）という認識をしっかりもって、それで人が幸福に生きるためにはどうしたらいいかということを、政治家だけじゃなくてもうちょっと国民一般と共有できるようになることで、これまでとは別の期待感も出てくるかもしれない。

浅見　「貧しい東南アジア」と「豊かな日本」という図式もそう遠くない将来、がらっと変わるでしょうし——。中国と対抗してアジアで指導力を発揮しようなどという発想自体が、もうどうかと思います。

己を知り、自画像を描き直す

落合　同感なんですが少し補足させていただくと、日本はこれまでアジアの盟主ってことでやってきましたよね、戦前から。でも今はアジアのダイバーシティ（多様性）っていうことを強調する側に立つべきだと思う。そういう意味でも東南アジアの側というか、そのなかでアイデンティティを問うというか、アジアは多様なんだ、たとえば儒教社会というかたちで一括りにはできない、いろんな伝統も文化もあるっていう側に立つべきなんだろうと思うんです。

浅見　その通りです。ただ、国家間のダイバーシティについては、日本がいわなくても、インドネシアやマレーシアが声を大にしていってくれるでしょう。儒教でもキリスト教でもなく、イスラムですから。だからむしろ日本がいわなきゃいけないのは、国内のダイバーシティの重要性だと思います。単一民族として団結して、中国に対抗してアジアの盟主になろうなどと夢想するのは日本自身にとっても不幸なことだし、ほかのアジアの国々にとってもえらい迷惑なことですから。

桃木　とてもいいことをおっしゃったと思うのは、日本のなかの多様性ということですね。これは歴史でいえば網野善彦さんが散々おっしゃられたことなんです。たとえば同じ日本でも私なんかは、関東人と関西人とでは同じ民族とは考えたくない（笑）。それに沖縄の独自性はもはや定番になりましたが、今まじめに北海道と北東北の先生たちが北方史というものを、日本の端っこじゃない新しい北方史というものを、ロシアや北太平洋とつながっている世界として教えることを一生懸命やり始めています。それから、日本海側は環日本海とかいってさまざまなことが前からやられていますし、そういう多様な要素を含んで、アジアともアジア太平洋世界ともいろんな形で結びついてきている。

清水　私も日本人にとっての自画像というんでしょうか、自己イメージを変えるということがこれからのアジアと日本の関係の再構築にとって必要なことなんじゃないのかなと思います。

たとえば、東南アジアというのは、親族関係では父方が金を持っていればそっちと仲良くする、母方が近くにいればそっちと近縁とけんかしたらもっと遠い縁者を頼るとか、オプションとしてさまざまな可能性があるなかで、融通無碍にその時々に選んでいくことが可能なシステムといっていい。あるいはシステムともいえないようなシステムといえばよいか。日本だってもともとはそういう仕組みをもっていたはずなんです。

落合　確かに今、己を知るっていうことがすごく大事になってきているような気がします。日本人が日本のことをわかっていないとか、うまく言葉にできないとか、それからやっぱりまだ日本がアジアを知らないという状況が圧倒的ですよね。

だからトヨタ財団の助成プログラムだって、アジアを直接経済的に引き上げるようなプロジェクトばかりじゃなくて、アジアに飛び込むことで日本の自己認識が変わるプロジェクトっていうか、そういうものに助成するのもいいんじゃないか。しかも、うまく東南アジアの国々と一緒にやれるようなね。そういう視点や発想が、これからますます大切になってくるんじゃないでしょうか。

加藤　この話の先は別のテーマになってしまいますけど、トヨタ財団がアジアの人とつきあう場合でも、「日本」の財団という既存の古いイメージを背負ってしまう面がどうしてもある。だから、「隣人をよく知ろう」的というか、改めてダイバーシティとしての日本の今の自画像をアジア内外の人々にちゃんとアピールし、知ってもらう努力が確かに必要かもしれませんね。

◉桃木至朗（ももき・しろう）
大阪大学大学院文学研究科教授。ベトナム史（中世史・チャンパ史）が専門。近年はハノイのタンロン遺跡発掘に関与しつつ、海域史や歴史教育の分野に重点を置いている。主著に『海域アジア史研究入門』（編集・岩波書店）、『中世大越国家の成立と変容』（大阪大学出版会）など。過去に東南アジア国別助成、隣人をよく知ろうプログラム選考委員を務める。

◉清水展（しみず・ひろむ）
京都大学東南アジア研究所所長。専門はフィリピンをフィールドとした文化人類学。ピナトゥボ山噴火後のアエタ族の再定住活動などにも深く関わる。主著に『出来事の民族誌 フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』（九州大学出版会）、『文化のなかの政治 ——フィリピン「2月革命」の物語』（弘文堂）など。過去にトヨタ財団国際助成、東南アジア国別助成選考委員長を務める。

当座談会は2012年11月5日、トヨタ財団会議室にて行われました。

【特集】
これからのアジアと日本

私たちの取り組み

――アジア隣人プログラム助成対象者からの寄稿

2009年度アジア隣人プログラム

マプタプット工業団地と住民の共存は可能か

◉中地重晴（熊本学園大学）

【助成題目】タイ東部工業地域マプタプットでの工業団地と共存できる地域づくりのあり方の検討とリスクコミュニケーションの実践

工業化がめざましいタイ

タイは、日本の約1.4倍の国土に、約6400万人が住んでいる。2010年の国民一人当たりの名目GDPは4992ドル（世界179カ国中87位）だが、実質GDP成長率は7・87％（22位）と急速な経済成長の真っただ中にある。

2011年7月頃、チャプラヤ川流域のタイ北部上流域から始まった洪水は、10月にはバンコク中心部にも拡大し、600万ha（全国75県中58県）が浸水し、200万人以上が被災した。アユタヤ県等の7つの工業団地が1か月程度水没し、再開には数か月かかった。日系企業も大きな被害を受け、経済的損失はタイ全土で約8700億円ともいわれている。

先ごろ、トヨタ自動車がタイでの自動車生産量を大幅にアップさせることを発表したが、近年、タイ各地で工業団地の造成、工場建設が進められている。国内的には、政治的な対立があるものの、それを飲み込む形で工業化のピッチが上がっている。

タイには欧米から多くの企業が進出している。日本から約2600社が進出し、多くは中小企業で、製造業は約半数とみられている。その中で、海外から進出してきた工場による公害・環境汚染の発生や本国工場との操業・排出規制に関するダブルスタンダードが以前から問題となっている。

住民参加型調査とリスクコミュニケーションの実践

タイ東部のラヨーン県にあるマプタプット東部臨海工業地帯は、タイ最大規模の工業団地であり、1980年代から日本のODAによる資金援助を受けて開発された。もともと果樹栽培が盛んな農業地域だったが、半ば強制的に農地を買収し、大規模な工業団地を造成し、その後、拡張が繰り返され、現在に至っている。

マプタプット病院でのワークショップで発言する筆者

過去、工場の操業に伴う大気汚染が問題になり、悪臭で中学校が移転した事件が起きた。1990年代半ばに、タイのNGOとグリーンピースが共同で調査し、VOC（揮発性有機化合物）による環境汚染を調査、社会問題化した。タイ政府が排ガスの排出規制を行うようになったが、毎年のように、有害ガスの漏えいや爆発事故があり、2012年5月にも少なくとも12人が死亡する爆発事故が起きた。周辺住民の一部は工業団地の操業に根強く反対してきた。

我々は、水俣病をはじめとした日本の公害の教訓を伝えるとともに、周辺住民と工業団地が共存できるのか、そのために必要なリスクコミュニケーションを模索するために、トヨタ財団より助成を受けて、住民とともに取り組んできた。

我々の活動中に、タイの行政裁判所がマプタプット工業団地の76の拡張計画を停止させる判決を下し、アナン元首相を座長とする4者協議会でその拡張計画の是非が議論されるなど、マプタプット東部臨海工業地帯の問題は、タイ国内の重要な政治課題の一つとなっている。

当初、住民からのヒアリングでは、政府や企業から工場の操業に関する情報が公開されていないことを知った。住民が最も不安に思うのは、井戸水が枯れ、赤く濁り、飲めなくなることである。井戸水の環境汚染の有無を住民自らが調査し、政府や工場に対し意見を述べる能力を身につけることが必要だと考えた。

それで、日本でも住民参加型の調査で使用されるパックテスト（試薬による簡易検査）と携帯型のpH計とEC（電気伝導度）計を用いて、住民自ら調査するために、工業用水や住民の飲料水の水源池からどのように河川が汚染されていくのか、工場排水の流入との関係を地図化する流域調査のワークショップを開催して、我々の経験と調査手法を伝えた。現在でも、タイのカウンターパートのNGOであるEARTHのメンバーがpH計とEC計を用い、工場排水と流域調査を継続している。

また、採取した井戸水を日本に持ち帰り、精密分析を実施した。COD、栄養塩類、有害な重金属もそれほど高くなく、鉄、マンガンのみが高濃度を示した。生活排水や工場排水の直接的な影響とはいえず、工場の進出に伴う大幅な人口増加のため、地下水の使用量が増加したことに起因する変化が起きたと考えられた。この推測は古くから住んでいる住民にはなかなか納得してもらえず、繰り返し、時間をかけて説明していきたい。

調査の過程で、工業団地の拡張計画を含む都市計画の変更、政府によるPRTR制度の導入・モデル事業の実施など、現在進行形の問題が多く存在し、問題解決のために、工業団地と住民が日常的に意見交換していく必要性を痛感した。リスクコミュニケーションの重要性をEARTHの協力を得て、住民に説明し、日本の経験を伝えた。タイではHIA（健康影響評価）という制度があり、住民参加のしくみがあるが、形式的に企業が実施している場合が多く、十分に機能しているとは言えない。工場の操業に対する不安や意見を住民自らが、工場関係者と意見交換し、工場に改善を求めることのできる場は重要だと思う。

我々の働きかけにより、2012年3月、工業団地近くの寺院で、地元住民と工業団地の代表者、地方行政の担当者が同席し、タイ人だけで工場の操業に関する意見交換（リスクコミュニケーション）会を開催することができた。タイ政府の国家健康委員会の担当者を進行役にし、2回目が5月に実施された。今後も継続していくとのことである。

日本の経験とタイの実践を隣国に広めていく

我々の2年半のマプタプット東部臨海工業地帯での経験とリスクコミュニケーションの実践方法をタイの市民、NGOだけでなく、将来的に工業化されていくミャンマーなど隣国の市民、NGOにも伝えていきたい。そのために、2013年3月初めにバンコクでシンポジウムの開催を計画し、準備中である。2012年4月、三井化学岩国大竹工場で爆発事故が起きた。日本での緊急時対応とタイでの対応とを比較しながら、そのシンポジウムが、タイの工業化の中で住民が安心して暮らしていく方法を見出していく一助になればと考えている。

上／フレアが目立つマプタプット工業団地と隣接するノンフェープ地区。中／工業用水の水源地（ドックライ）での水質測定。下／2012年3月2日、マプチャルート寺院でのリスクコミュニケーション。

【特集】
これからのアジアと日本

アジア隣人プログラム特別企画「未来への展望」

――キックオフワークショップの報告

助成する、されるの関係を越えたパートナーシップと「知」の構築を

２０１２年12月18日(火)、当財団の事務所がある新宿三井ビル44階の会議室にて、アジア隣人プログラム特別企画「未来への展望」のキックオフワークショップ「実践者の学びあいとつながりから描く『未来への展望』」を開催しました。

重層的なネットワークの形成

特別企画「未来への展望」は、国際協力ＮＧＯを中心としてアジア各地で実践活動をしてきた団体がその経験を振り返り、組織内外の関係者と共有すること、さらにその過程で明らかとなった知見や未来に向けた提言を報告書としてまとめ、広く社会に発信する企画に対して助成するプログラムです。

日本の中でも実績のあるＮＧＯ団体を中心に、国内外19の団体へ助成を行っています(助成対象の一覧は、本誌18ページをご覧ください)。

トヨタ財団では、今回の特別企画で、個別の助成プロジェクトが提示する成果はもとより、その総和からアジアと日本の関係のありかた、とりわけ民間の国際協力の分野で今後、アジアと日本がどのような関係を構築していくことができるのか、その展望が見えてくるのではないかと期待しています。

そのような期待のもと、今回の助成事業では、財団と助成対象者との1対1の関係のみならず、助成対象者の間にも重層的なネットワークを形成したいと考えており、今回のワークショップもそうした取り組みの一環として開催しました。師走の忙しいなかでしたが、15団体から22名の方にご参加いただきました。参加団体は、活動年数が50年以上という歴史のある団体から10年未満という若い団体まで、活動分野も保健医療、環境、まちづくり、農村開発等々と幅広く、日本のＮＧＯの縮図のような集まりとなりました。

多様な人々と連携し、社会に発信

ワークショップは、はじめに国際協力ＮＧＯセンター（JANIC）事務局長山口誠史氏より「日本のＮＧＯの課題とその克服に向けて」と題したプレゼンテーションが実施されました。

近年の日本の国際協力ＮＧＯを取り巻く環境として、震災等を経てボランティアやＮＧＯ／ＮＰＯに対する社会全体の期待が高まる一方で、国内でのＯＤＡ予算削減、また、世界的にみても欧州通貨危機等により海外援助が停滞しているそうです。さらに、国際協力の分野においてＮＧＯ以外のアクターが増加（社会的企業、国内ＮＰＯの海外進出など）しているという変化もあります。

こうした状況において、組織基盤、プロジェクト・マネジメント、政策提言能力の脆弱さという課題を克服していくことが求められており、その点を意識した人材育成が重要となるとのことです。プレゼンの最後には、ＮＧＯが国際協力で培ってきた経験が、日本国内の課題解決に役立つ可能性があるのではないか、そのためにも多様な立場の人々と連携して活動を進め、社会に積極的に発信していくことが重要であるとお話されていました。この指摘は、参加した団体にとっても今後のトヨタ財団の助成プログラムを考えていくうえでも改めて確認すべきポイントです。

助成対象の方々と助成財団の協働

山口氏のプレゼンテーションに続いて、参加団体による団体紹介、４つのグループに分かれてのグループワークへと展開し、今回の助成により各団体がめざす成果とその発信、「特別企画」全体としてのとりまとめと発信の方法、今後の進め方について議論をしました。

個別プロジェクトの進め方としては、「パートナーシップ（お互いさまの関係）」、「相互理解」を大切にすべきだという点があげられ、その実現のためにどうすればよいのかということが共通課題となっていました。具体的に出てきた意見としては、「現場を見て事実をきちんと確認することが重要」、「理念も大事だが、そこに至る現実的なステップを共有することが大切である」、「共有と共感は違う」、「ファシリテーターの役割が重要」、「事前準備をしっかりする」などです。

その後、今回の特別企画のとりまとめについて各プロジェクトの成果のみならず、その成果をとりまとめることで市民社会、国際協力といった分野における普遍的な「知」を構築することができるのではないか、そのためにも助成対象の方々と助成財団とが、協働することが重要だという議論がなされました。

その他にも助成財団に対しては、「長期的スパンで取り組める支援を期待」、「支援する、されるという関係を越えていくことが必要」、「一般社会との接点としての役割を担ってほしい」という意見なども出され、助成する側、される側のパートナーシップのありようというものが改めて本企画で問われていることを実感しました。

「日本型ＮＧＯ」の姿とは

ワークショップの最後には、コメンテーターの熊岡路矢氏（日本映画大学教授）が、特別企画の成果への期待として三つの点でコメントされました。

一点目は、パートナーシップです。国際協力の現場で真のパートナーシップとは何かを追及し、それに近づくようにステップアップしていくことが求められていること。そのためにも成功や失敗体験の共有が重要であり、とりわけ失敗した要因を分析して普遍化することは意義があるとコメントされました。

二点目は、政策提言です。活動分野ごとに政策提言していくことも必要であるが、JANICや各地域でＮＧＯのネットワークを形成している団体と連携して、ＮＧＯ総体として提言していくことも重要であり、そのことを一つの課題として追及して欲しいとのことです。

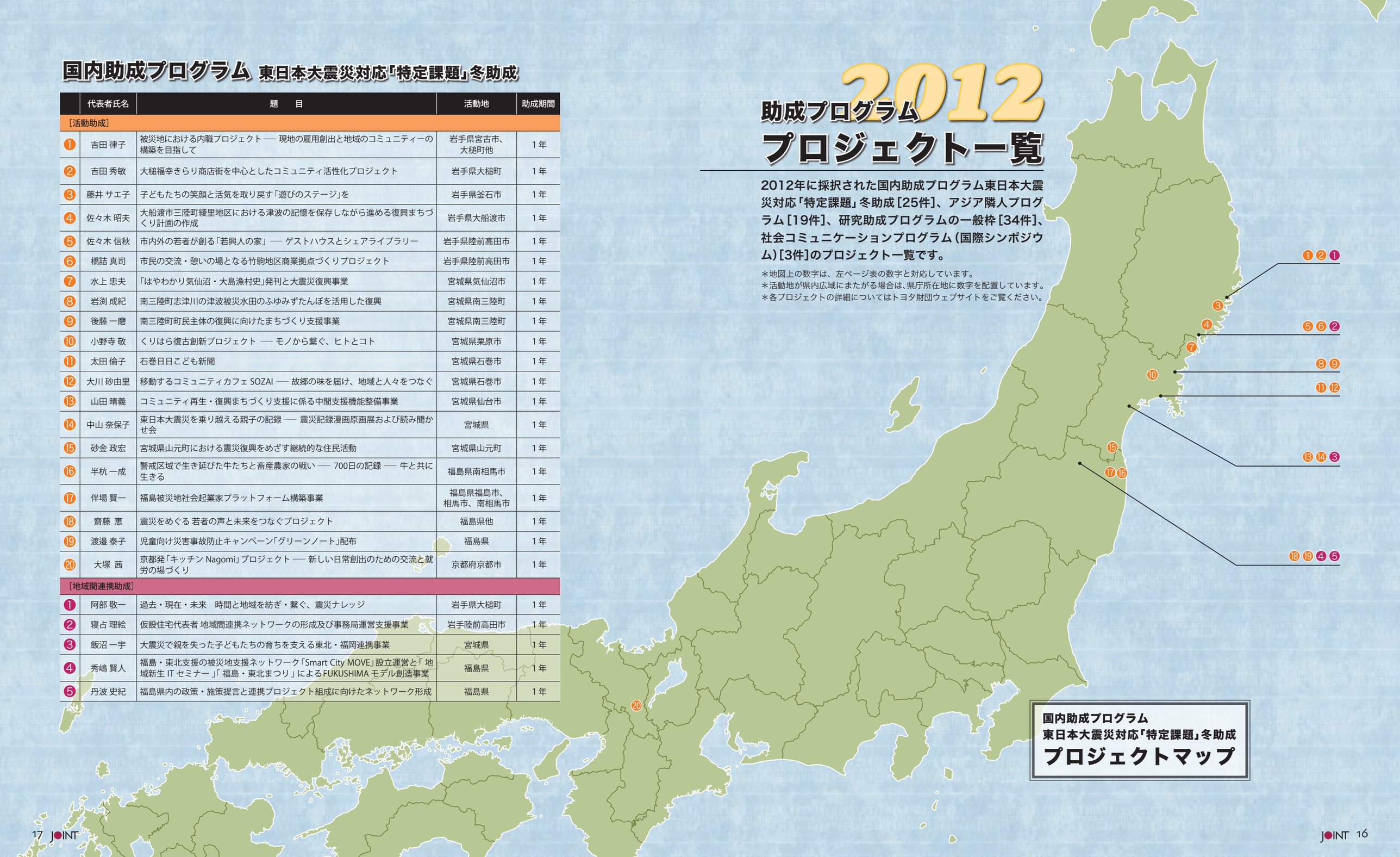
三点目、発信という点では、国際協力の現場で事業の直接的影響を受ける現地の人々に届くような成果発信の在り方を模索し、狭い意味での関係者だけでなく、広く社会に発信していくことも意識してほしいとお話されました。最後には、今回の企画を通じて、欧米のＮＧＯとは違った「日本のＮＧＯの特徴」が抽出できるのではないか、そんな期待もあげられました。

午前10時から夕方17時までという長丁場でしたが、後半には本音で議論する場面も多く見られ、たいへん実りの多いワークショップとなりました。

2012 助成プログラム プロジェクト一覧

2012年に採択された国内助成プログラム東日本大震災対応「特定課題」冬助成［25件］、アジア隣人プログラム［19件］、研究助成プログラムの一般枠［34件］、社会コミュニケーションプログラム（国際シンポジウム）［3件］のプロジェクト一覧です。

＊地図上の数字は、左ページ表の数字と対応しています。
＊活動地が県内広域にまたがる場合は、県庁所在地に数字を配置しています。
＊各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。



国内助成プログラム
東日本大震災対応「特定課題」冬助成
プロジェクトマップ

国内助成プログラム 東日本大震災対応「特定課題」冬助成

	代表者氏名	題　目	活動地	助成期間
［活動助成］				
1	吉田 律子	被災地における内職プロジェクト ── 現地の雇用創出と地域のコミュニティーの構築を目指して	岩手県宮古市、大槌町他	1年
2	吉田 秀敏	大槌福幸きらり商店街を中心としたコミュニティ活性化プロジェクト	岩手県大槌町	1年
3	藤井 サエ子	子どもたちの笑顔と活気を取り戻す「遊びのステージ」を	岩手県釜石市	1年
4	佐々木 昭夫	大船渡市三陸町綾里地区における津波の記憶を保存しながら進める復興まちづくり計画の作成	岩手県大船渡市	1年
5	佐々木 信秋	市内外の若者が創る「若興人の家」── ゲストハウスとシェアライブラリー	岩手県陸前高田市	1年
6	橋詰 真司	市民の交流・憩いの場となる竹駒地区商業拠点づくりプロジェクト	岩手県陸前高田市	1年
7	水上 忠夫	「はやわかり気仙沼・大島漁村史」発刊と大震災復興事業	宮城県気仙沼市	1年
8	岩渕 成紀	南三陸町志津川の津波被災水田のふゆみずたんぼを活用した復興	宮城県南三陸町	1年
9	後藤 一磨	南三陸町町民主体の復興に向けたまちづくり支援事業	宮城県南三陸町	1年
10	小野寺 敬	くりはら復古創新プロジェクト ── モノから繋ぐ、ヒトとコト	宮城県栗原市	1年
11	太田 倫子	石巻日日こども新聞	宮城県石巻市	1年
12	大川 砂由里	移動するコミュニティカフェ SOZAI ── 故郷の味を届け、地域と人々をつなぐ	宮城県石巻市	1年
13	山田 晴義	コミュニティ再生・復興まちづくり支援に係る中間支援機能整備事業	宮城県仙台市	1年
14	中山 奈保子	東日本大震災を乗り越える親子の記録 ── 震災記録漫画原画展および読み聞かせ会	宮城県	1年
15	砂金 政宏	宮城県山元町における震災復興をめざす継続的な住民活動	宮城県山元町	1年
16	半杭 一成	警戒区域で生き延びた牛たちと畜産農家の戦い ── 700日の記録 ── 牛と共に生きる	福島県南相馬市	1年
17	伴場 賢一	福島被災地社会起業家プラットフォーム構築事業	福島県福島市、相馬市、南相馬市	1年
18	齋藤 恵	震災をめぐる 若者の声と未来をつなぐプロジェクト	福島県他	1年
19	渡邉 泰子	児童向け災害事故防止キャンペーン「グリーンノート」配布	福島県	1年
20	大塚 茜	京都発「キッチン Nagomi」プロジェクト ── 新しい日常創出のための交流と就労の場づくり	京都府京都市	1年
［地域間連携助成］				
1	阿部 敬一	過去・現在・未来　時間と地域を紡ぎ・繋ぐ、震災ナレッジ	岩手県大槌町	1年
2	寝占 理絵	仮設住宅代表者 地域間連携ネットワークの形成及び事務局運営支援事業	岩手陸前高田市	1年
3	飯沼 一宇	大震災で親を失った子どもたちの育ちを支える東北・福岡連携事業	宮城県	1年
4	秀嶋 賢人	福島・東北支援の被災地支援ネットワーク「Smart City MOVE」設立運営と「地域新生 IT セミナー」「福島・東北まつり」によるFUKUSHIMA モデル創造事業	福島県	1年
5	丹波 史紀	福島県内の政策・施策提言と連携プロジェクト組成に向けたネットワーク形成	福島県	1年

助成プログラム2012
プロジェクト一覧

アジア隣人プログラム

代表者氏名	題　目	助成期間
モハマド・アッバス・サブール	アジアでの自然災害対応に従事した実践者によるワークショップ	1 年
藤井 克徳	障害者の就労機会の創出による社会参加の促進 ── アジアの障害当事者による就労支援と生計創出の先駆的な実践と経験の交流	1 年
磯田 厚子	アジアでの持続可能な農村開発の経験から学ぶ	1 年
永石 安明	オイスカにおける、これまでの人材育成活動の検証と今後の活動の展望を導き出すための経験者交流会議──持続可能な社会を目指して	1 年
菅波 茂	「 開かれた相互扶助 」ネットワーク構築プログラム ── アジアの更なる多様性の共存を目指して	1 年
横田 漠	ガンジス流域変わりゆく水の利用 ── 水利用の格差なき社会形成に向けて	1 年
室 雅博	アジアの町並み保存ネットワークとその未来 ── 歴史遺産、民族アイデンティティの継承、アジアのダイナミズム	1 年
前中 久行	環境協力を通じた相互理解の深化──中国黄土高原での緑化協力を通して	1 年
長畑 誠	インドネシア・日本「現場でまなびあう地域づくり」── 固有の自然と文化に根ざし、多様な主体が協働し響き合う地域を目指して	1 年
筒井 哲朗	シャプラニールにおける「 国際 NGO と現地 NGO の役割と関係 」の検証と記録、日本 NGO とのシェア── MDGs と CSO 開発効果を視野に入れた、より良いパートナーシップの構築と普及を目指して	1 年
根本 悦子	アジアでの草の根活動──成功と失敗の経験から未来への展望を導く	1 年
伊藤 道雄	アジア開発途上国と日本の新しい関係と協働への展望と提言──公益信託 ACT と現地 NGOs の戦略会議	1 年
本田 徹	健康格差を乗り越え共に生きる社会を目指して ── プライマリ・ヘルス・ケアの実践としての住民参加の健康づくりの促進	1 年
和田 信明	地域住民による自然環境管理 ── マイクロ・ウォーターシェッドを軸とした取り組みの共有	1 年
フィリップ・スミス	アイデンティティに根ざした開発 ── アジアの少数民族・言語グループにとって、文化とアイデンティティを適正かつ持続的な開発へのスプリングボードとする方法の模索	1 年
クリスティナ・エゲンター	持続的な生計からグリーン・エコノミーへ、大規模な貧困削減と公平な自然保護に取り組んだ好事例──アジア各地の WWF 実践者たちの経験交流ワークショップ	1 年
木口 由香	人々の暮らしが尊重される開発と資源管理のあり方を求めて ── 東アジア・メコン河流域国の市民社会の経験交流と未来への政策提言	1 年
リー・ミュンケン	アジアにおける多文化家族についての認知と生活を改善するための協働	1 年
ランダル・ヘルテン	森林減少を食い止め、先住民族や地域住民の権利を尊重した未来型の森林資源の利用と保全の形態を模索するワークショップ ── 東南アジアの熱帯林の未来に向けた提言	1 年

社会コミュニケーションプログラム（国際シンポジウム）

代表者氏名	題　目	助成期間
中地 重晴	タイ東部工業地域マプタプットでの工業団地と共存できる地域づくりのあり方とリスクコミュニケーションに関するシンポジウムの開催	1 年
原田 公	インドネシアにおけるコミュニティ基盤型森林管理をめぐるマルチ・ステークホルダー・ワークショップ ── 参加型土地利用と保全計画の策定をめざして	1 年
ジャクリーン・ボロック	移住についてのメコンシンポジウム ── メコン隣国からの移住者との共生 ── メコン地域における移住者の融合と社会的一体性を実現するための整合性ある対応をめざし	1 年

研究助成プログラム

代表者氏名	題　目	助成期間
［共同 1］		
筒井 一伸	ヴェトナム農村における住民参加型 WebGIS の構築と「コミュニティ課題の空間的見える化」に関する研究	2 年
齊藤 英介	ベトナムにおける教育格差改善のための小・中学校改革推進方策に関する研究	2 年
デビッド・スレイター	可能性を開く声 ── 3･11後の東北におけるコミュニティの再建と語りの記録	2 年
貫井 万里	革命後イランにおける映画と社会の学際的研究 ── 権威主義体制下の娯楽と抵抗の文化	2 年
中田 英樹	原発災害を契機とした「国内植民地」構造再編の把握 ──「公害」の経験を参照軸とした新たな農業・農村研究の構築	2 年
［共同 2］		
渡邊 登	ポスト福島第一原発事故における地域コミュニティの持続的「 発展 」「 再生 」の可能性	2 年
相原 洋子	ネパールの都市における、産後女性の健康、生活の質改善をめざした、持続可能な水利用管理方法の開発	1 年
伊藤 明	ラオス北部におけるテナガエビの資源管理の実践 ── 住民参加によるテナガエビ資源回復への試み	2 年
阿部 恭子	地域における犯罪者の再犯防止プログラムの構築に関する研究──犯罪加害者家族支援によるアプローチ	2 年
金 敬默	海外へ再移住する「脱北者」たちの理想と現実 ──トランスナショナル・ネットワークの活用とボーダー・コントロールの視点から	2 年
沖本 克子	思春期に発症した2型糖尿病の子どもへの療養支援に関する研究 ── 治療と療養の継続性に焦点を当てて	2 年
ラザロ・ミゲル・エチェニケ・ディアズ	アレハンドロ・デ・フンボルト国立公園 (キューバ) における伝統的生活様式による絶滅危惧動物の保全	2 年
前川 佳遠理	戦争をめぐる日蘭関係の解決にむけて ── 在蘭邦人による「他国史」の内在化と現地のニーズに対応した民間主導の日蘭歴史和解プログラム生成に向けた研究	2 年
［個人］		
山根 裕美	ケニア、ナイロビ国立公園とその周辺の人為的景観下におけるヒョウ (*Panthera Pardus*) の保全生態学研究	1 年
菊池 真純	民族の聖山と政府の保護区が併存する地域での資源管理に関する考察 ── 中国広西大瑤山を事例に	1 年
村尾 るみこ	アフリカの紛争後社会における地域経済の再建 ── 住民の生計活動にみられる新たな秩序形成	2 年
山崎 健	日本における野生動物の分布域の歴史的変遷とその要因 ── 考古動物学の確立をめざして	2 年
高 誠晩	非体験世代のための新しい死生観の創出 ── 紛争後の東アジア島嶼地域から	2 年
辛島 理人	冷戦下の日本・アジア・アメリカにおける社会民主主義の連鎖と相関 ── 民主社会主義・米国リベラル・フィランソロピー	2 年
相戸 晴子	旧産炭地の課題にアプローチする子育てネットワーク形成の研究 ──「筑豊子育てネットワーク」15年間の活動記録を中心に	1 年
姜 明江	社会的弱者の服薬アドヒアランスを向上させる要因に関する研究	2 年
鷲谷 洋輔	コンタクト・ゾーンとしての道場 ── 日系カナダ移民の柔道を通じた共生への道のり	2 年
櫻澤 誠	戦後沖縄 / 日本における沖縄戦・米軍基地と開発をめぐる歴史学的研究	2 年
緒方 宏海	中国黄海島嶼の社会と歴史 ── 島嶼への人類学的試み	2 年
根本 雅也	アメリカにおける原爆の意味と被爆者による語り部活動 ── 暴力の意味 / 社会 / 被害者の人類学的研究	2 年
川瀬 由高	「迎福除災」の仮面劇 ── 中国・江南地域に於ける「社区」制度とコミュニティの社会人類学的研究	2 年
八尾 祥平	戦後東アジア・東南アジアの社会変動によるエスニック・マイノリティ形成の社会的メカニズムと「多文化共生」の可能性についての社会学的考察 ──「琉球華僑」を事例に	2 年
香川 めぐみ	分離独立紛争後の治安再構築にむけた「正義」の形成 ── フィリピン南部ミンダナオ紛争を事例に	2 年
ジョシ・サワン	ネパールのダファー音楽におけるヒンドゥー教と仏教の関わりとその伝承について	1 年
温井 智美	新人看護職者のレジリエンスに関する研究 ── 新人看護職者はどのように精神的な回復力を身につけたのか	2 年
三浦 綾希子	多文化地区における社会関係資本の可能性 ── ニューカマー第二世代への教育支援の体系化に向けて	2 年
千須和 直美	思春期を対象とした食と心を結ぶ教育プログラムの構築と評価 ── Body, Eating and Mind: BEAM プロジェクト	2 年
今野 泰三	パレスチナにおけるイスラーム系 NGO の活動・効果に関する基礎研究 ── 日本の市民社会とイスラーム系 NGO の連携に関するヴィジョン・方策の作成に向けて	2 年
溝田 浩二	「遊び仕事」としてのニホンミツバチ伝統養蜂が地域生態系保全に果たす役割	2 年

JOINT ホット・インタビュー

話を聴くこと、自然を感じること、そして忘れないこと

傾聴移動喫茶「Café de Monk」代表
金田諦應
◉聞き手：喜田亮子
（トヨタ財団プログラムオフィサー）

「Café de Monk（カフェ・デ・モンク）」は、宮城県栗原市にある通大寺の金田諦應住職が中心となって、僧侶、牧師、神主等、宗教家や医療者など専門家が被災地を訪問する移動式傾聴カフェ。Monk は英語でお坊さん、お坊さんに「文句」を聞いてもらう、お坊さんも文句を聴きながら、一緒に「悶苦」する、という意味が込められているそうだ。この移動するカフェは震災後避難所からスタートして、現在は仮設住宅を継続的に何度も訪問。私たちはまず、金田住職へのインタビューの前日に石巻開成仮設住宅の集会所で開催された「Café de Monk」におじゃました。

集会所の入り口には、がれきの中から持ってきた板で金田さん自らの手で作ったという看板が置いてある。集会所の中は、テーブルの上に季節の花が活けてあり、BGMが流れるゆったりとした明るい雰囲気につつまれている。参加者は、色とりどりのケーキが並んだ箱から好きなものを選ぶことができ、コーヒーや紅茶がふるまわれる。

この日は、東北大学の「実践宗教学寄附講座」で全国から集まった宗教家も参加していた。三々五々と集まってくる仮設の住民の方々は、数珠づくりに参加したり、お坊さんや牧師さんとお話したり、ケーキとコーヒーを楽しみながらそれぞれ自由に過ごすことができる。何名かのお坊さんが女性の手の上に手を重ね「ぴんぴんころりぴんころり」と唱え、周りでは笑いが起きる場面も。

ある一人の女性の方にお話をうかがうと、「お墓がなくなって、納骨できなくてどうしようかと思っていたんだけどね。このカフェに来ていた住職さんに相談したら、要は気持ちの持ちようだからって。それでずいぶんと心が軽くなりました」と語っていた。「仮設内の近所の人にも声かけてね、このカフェに来てお話すると気持ちが楽になるよって誘っているの。でも、男の人はなかなか出てこないけどね」と。じっさい、この日も集まっているのは女性が中心だった。

カフェ〝閉店〟後は、てきぱきと片付け、参加したスタッフ全員で集合写真を撮影して終わる。最後には、金田さんから「傾聴は、私たち聴く方の体調が悪いとできません。被災された方のためにも自分の体を大切にしてください」との言葉がけがあった。

翌日、栗原市に移動。通大寺におじゃまして住職である金田さんに「Café de Monk」の活動と、震災後の人々の変化やご自身が感じられていることなどを中心にお話を聴いた。

――まずはやはり、東日本大震災当日の「その時」のことをお話いただけますか。

震災の日は、ここ栗原にいました。栗原市は、内陸部ではいちばん揺れが大きいところで震度は7でした。大きな揺れを感じた時点ですぐに、これは死者の数2～3万人になるなって思いましたよ。津波が来るなって。それで体がぶるぶる震えてね。沿岸部のことがすごく気になりました……。

忘れられないのは、あの日の夜に見た星空。電気が消えて、車も走っていないので、排気ガスもなくて空が澄んでいたから本当に綺麗だったなあ。悲しいほどに綺麗でした。宮沢賢治『なめとこ山の熊』の最後のシーンを思い出しましたよ。

夜空を見あげて宇宙の冷徹な哲理を感じました。宇宙というのは本当に残酷なものだと。しかし、それが真理なんですね。広大無辺の宇宙の営みの中で考えると、世界は破壊と再生の繰り返しです。宇宙から見るとわれわれの命は一つなんですよ。「Something Great」という言葉があるじゃないですか。まさにあれですね。私たちの命はみな、その不思議で偉大な何かからはじまったんだということを体で感じました。

――震災後、どのようにして活動をスタートされたのですか。

はじめは、栗原の火葬場で読経ボランティアをしました。沿岸部は火葬場が壊滅したので、栗原にご遺体がどんどん運ばれて来ました。それで仲間に声かけて、読経ボランティアをやろうと。ただ、公共の施設なので手順

取材：2012年10月26、27日

助成対象者 info

金田諦應（かねだ たいおう）
（2012年度 国内助成プログラム東日本大震災対応特定課題「活動助成」）

[題目] 東日本大震災「心と命」のサポートプロジェクト

[プロジェクトチーム名] 傾聴移動喫茶「Café de Monk」

[概要] 東日本大震災での突然の死別や財産を失う等によって心に深いダメージを受けた人々に対し、僧侶・牧師・神父・神主等の宗教者やそれを支援する医療者・福祉関係者の協力のもと直接被災地に赴き、移動式喫茶店「Café de Monk」（カフェ・デ・モンク）を運営し、被災者の「心の声」「心の叫び」を聴くことにより、彼らの心の負担を軽減させ、復興への足がかりを作る事を目的とする。

震災より一年が経過し、心の復興に個人差が生じている。このような時期に、直接被災地に赴き喫茶店という「ホッとする空間」の中で一人ひとりを見据えた傾聴活動を行うことは、被災者の抱える様々な問題を再確認し、更に問題解決に向け宗教者という立場を最大限に生かしたアドバイスが直接できるという効果があると考えられる。更に問題の種類により医療関係、福祉関係との連携をとりながら問題解決を共に考える。またカフェでの参加者同士の交流を通し、仮設住宅内でのコミュニティ構築の一助としたい。仮設住宅の規模の大小や立地条件により、支援の量と質に差異が生まれている。これまでの一年間の活動を通じて養われた情報網を活かし、できるだけ小規模の仮設に入り活動する予定である。

を踏まないといけないんですよ。いろいろな宗教の方がいますから。そのあたりのことを配慮しながら、市や業者と話し合いました。何か活動をするとき最も大切なのは、現場の人ときちんと話をすることですね。火葬場とは普段からのお付き合いもあったので、私たちの思いをきちんと伝えました。業者の人も「和尚さんたちがそういう気持ちなら私たちも手伝うから」って、私たちが直接交渉するのではなくて、火葬場の人が遺族の方と交渉してくれました。

最初に来たのは小学校5年生の女の子。その子のお母さんとお父さんが「和尚さん待っていてください。もう一体来ますから」って言うんです。そしたら、それは同じクラスの友達でね。「せめて二人一緒に往かせてあげたい」って、ご両親がね。いろいろな現場を知っている私たちでも、さすがにショックでね。これは覚悟を決めてやらないといけないなと思いました。四十九日までは、そういうことの連続でした。四十九日になっていろいろと他の支援活動なども動いてきたので、自分たちの活動をシフトしようってことで、四十九日行脚で被災地をまわりました。13名の仲間と牧師にも声かけてね。

目の前で起こっていることをありのままに受け止める、そういう意味の「行脚」だったんです。文字通り、じつにひどい状況でしたね。この現実とどうむきあったらいいのか、悲しみの只中にある人にどういう言葉をかけたらいいのか。まさに宗教がはたすべき役割の原点にかえったように感じました。宗教の原点というのは、自然といかに向き合うかです。自然に対して人類は畏怖する心をもっていた。畏れとおののきのなかで、自然に対して自分たちはどういう構えで生きていったらいいのかっていうことを、人間は一生懸命考えてきた。それが宗教の原点なんです。

——その行脚の後、「Café de Monk」をスタートさせたのですね。

行脚の後に「移動傾聴喫茶」をやろうと思いついて、最初3か月位は避難所をまわりました。カフェを開催するときは、テーブルに季節の花をしつらえて、おいしいケーキとコーヒー。BGMも流してね。空間の演出にはこだわっていますよ。「茶室」に見立てた演出です。かける曲はジャズ・ピアニストのセロニアス・モンク。まあ、大好きなジャズの話になると長くなるから、これは別の機会にしますけどね。

今は、3、4名がコアになって動いています。こうした活動というのは、人がたくさんいればいいっていうものではないんですよ。被災地は状況がどんどん変化していくのでね、それに対応するという意味でもそんなに人数は多くないほうが身軽です。

スタートしてからスタッフ全員、ずっと無償でやってきました。2012年度はトヨタ財団の助成が決まったので、少しですが人件費も払っています。これは大きいです。やっぱり無償では限界があります。長くつづけられない。

石巻開成仮設住宅の集会所で開催された「Café de Monk」の様子

——「傾聴」活動というのはどういうものなのでしょうか。

今回、東北大学の「実践宗教学寄附講座」で研修に来た人には、こういうことを言いました。ただのおしゃべりで終わらせてしまったら、宗教者がそこにいる理由はない。ほかの団体だってやっていることだよって。人間っていうのはどんなに苦しい時でも笑えるようになるんです。でもね、笑顔の後ろにある悲しみは、変わらないんですよ。その笑顔の後ろにあるものを見つけて、それを引き出してあげれば語り始めるから、そうしたらその話に耳を傾けることでその人に寄り添い、物語の糸を紡いでいけるように手助けする。

それが「聴く」ということなんです。一人ひとり、それぞれの人にそれぞれの生きてきた物語がありますから。

ですから、傾聴というのはマニュアルがあればできるというものではありません。聴く側の人間性や宗教性が試されているのだと思います。それとね、宗教的ケアは私たちの命はもともと一つである、私とあなたは同体であるという立ち位置なんです。常に「私」対「あなた」という心理的ケアと違ってね。

——今回の活動には、宗教・宗派の違いを超えて人が参加しています。震災前からそういうネットワークがあったのですか。

彼らとは、自死の問題、看取りの問題で何度か顔を合わせていました。一緒に活動をスタートさせた岡部健先生という看取りの問題に取り組んでいるお医者様がいて、その先生が宗教家を看取りの現場に参加させたいということで活動されていました。残念ながら岡部先生は先月ご病気で亡くなられましたが、先生とは医療と宗教ということについてよく議論しました。

——「Café de Monk」をはじめたころと1年半以上が経った今とでは、被災者の方の様子はどうですか。

一概にこうですと簡単には言えませんね。ただ、はじめは、みなさん家族や財産を失って、大変な状況の中での同じスタートです。でも一年たって、それぞれの立場が変わってきましたよね。ゴールに近づいている人もいるし、まだまだっていう人もいます。今は、そのいろいろな状態にある多様な人々を全部視野にいれて、活動していかないといけない難しさがある。やっぱり公共の支援というのはいくつものルールがあるから、それから漏れてしまう人が出てくるんです。でもじつは、そのルールとルールのはざまに問題が潜んでいる。活動を続けているとね、いろいろな問題とぶつかって解決できないもどかしさがあるけど、宗教者としてやるべきこと、できることに限定してやっていくしかないなと思っています。

それと、最近「幽霊」を見る、何かに憑依されるっていう人が増えてきています。日本では通常、お葬式を経て、お別れをして、周りの人と悲しみを共有して、故人をおくっていくわけですよね。今回の非常時には、それがなかなかできなかった。特に東北は、まだまだそういう葬送の儀礼を通した共生共死の文化がのこっている地域。そういうことが今になって影響し、特殊な現象として出てきているんでしょうね。

——宗教家であっても、今回のような未曾有の災害の中で被災者に向き合う経験は、滅多にないことだと思いますが。

宗教者にはそういう「弔い」の経験がないといけないんですよ。特に伝統教団。伝統教団は、葬式仏教って揶揄されることもあるけど、お葬式に携わっていると人の悲しみを分かち持つ機会がたくさんあるんです。そういう経験をこういうときに活かしなさいということです。だから、お葬式というベースがきちんとできていない人は、被災地に来なくてよいと私は言っています。

私は、「臨床仏教」と呼んでいるんですけど、人間と向き合う仏教でないといけないと思います。というより本来仏教とくに大乗仏教の立ち位置というのは、臨床なんですよね。だから根本に戻ればいいんだなと思うわけですよ。その思いを震災後の活動の中で強くしています。

——「Café de Monk」の活動は、いつごろまで続ける予定ですか。

資金が尽きるまで、ですかね。まあ、本当いうとあと2、3年と考えています。というのは、地元には地元の宗教家がおりますので

カフェ閉店後の記念撮影

ね。最初から地元のお寺に2、3年間はこの地に入らせてもらいますよって言っています。その後、私たちは、去っていく、風のようにね。やっぱり人にとって地元のお寺との関係が大切ですから。今回は、地元のお寺も被災していて本当に大変でしたから、私たちは「つなぎ」なんです。

お寺のお坊さんというのは地域の〝医者〟です。それぞれの地域でお寺がそんなはたらきができるのが理想ですね。これはちょっと難しいなと思ったらほかの専門家に相談してつないでいければいい。祖父の代なんかはそれが当たり前でしたけど。今は、すべてが専門分化したものをつないでいくものが必要なんです。そういう役割をお寺は担うべきなのではないかと思います。だから、私たちの活動だって少しずつ地元に返していくのがいい。それで今のうちから地元のお寺にも、私たちが去った後は、しっかりと受け止めてくださいねって言っているんですよ。

宮城県栗原市の通大寺にて

——今後私たち日本人は、被災された方々や、震災によってあぶりだされた社会の数々の問題と、どう向き合っていけばよいとお考えでしょうか。

正直に言って、私にもわからないですね。東京の人たちにはちゃんと経済活動してもらわないと困るとも思うけど、それを支えるのはエネルギーだったりするから、原発をふくめたエネルギーの問題をどう考えたらよいのか。近代の社会システムとしてあらゆることが複雑に関係していることを考えると難しいです。

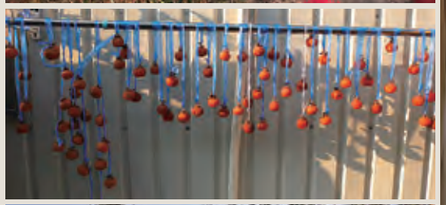
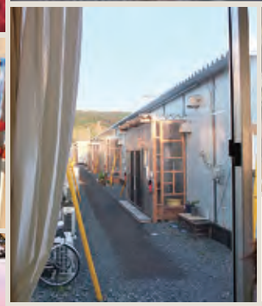
思い返すと、70年代に「成長の限界」という問題提起がありましたね。しかし、結局その問いは深まらなかった。今回の震災とその後の原発の事故で、そのことを考え反省しました。目先の数字の上の議論ばかりしていてはだめです。一人ひとりが、これでいいのかと、日本の未来を根本から真剣に考えなくてはいけない時だと思います。

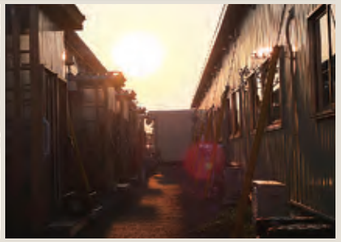
そのためにも、一つはっきりと言えることは、今回の震災とその後の1か月のことを忘れないでほしいということ。ろうそくの明かりのもと、家族や大切な人のことを思って過ごしたあの感覚を。あの1か月は本当に苦しくてつらかった。でも、だからこそ、あの時、日本は一つになれたんだとも思います。震災から時間が経過しても、東北を思い、そのことを忘れないでほしい。

それともう一つは、見えないものを見る、予測しにくいものを予測する、数字や理屈でわからないものを感じ取る、そういった失われつつある人間の直感というか「感性」を現代人は取り戻す必要があると思います。それは、いうなれば古代から人間が自然と向かい合うことで鍛えてきた能力です。それを取り戻す必要がありますね。

そんな自然と人の本来あるべき関係を、私たち一人ひとりが考える。誰かがやってくれるということではなくて、自分ごととしてね。容易でないことはわかっています。こういう私だって近代の大きな社会システムの上に乗っかって生きているわけですから、自分の思うようにはいかないことも多く、つらく苦しいときもあります。でも、それでも、投げやりにならずに考え続けないといけないと思っています。

最後に、全国の子どもたちに今回の震災のこと、命のことをきちっと伝えてほしい。たとえば、震災で失われた命を2万という数値に置き換えて済ませてしまわないで、数に還元できない一人ひとりの命の集合として受け止め、そのことを子どもたちにも丹念に教えていく必要があります。その点、子どもの感性にはすばらしいものがあります。被災地の子どもたちを見ていると、命に対して、死に対してまっすぐに向き合っているのがわかります。そんな彼らこそが20年後、30年後の日本を真にリードしていくと思いますよ。



EDITOR'S COLUMN
石巻でのある一日

2012年10月26日、東京から新幹線と高速バスを乗り継いで石巻駅に着いたのが、午後2時を少しまわったころだった。石巻の中心部から5キロほど離れたこの日の取材場所までは、さらに駅からタクシーをつかう必要があった。

この「開成仮設住宅」は一千戸を超える被災地最大級の仮設住宅群であり、現在約4000人が暮らしているといわれる。工業団地の建設予定地だけあって、ともかく敷地面積が広い。私たち本誌LOINTの取材班3人は助成対象である金田諦應さんの「カフェ・デ・モンク」の開かれている集会所を探すのに、住宅群のなかをしばらく右往左往しなければならないほどだった。

金田さんへのインタビューは翌日栗原のお寺で行うことになっていたので、この日はその他の僧侶の方や、被災された方々のお話をお聞きしたりしながら、「傾聴カフェ」の様子を終わりまで見学。終了後、スタッフみんなで手際よくかたづけをし、記念撮影をしたあと私たちは、偶然居合わせた岡部健先生（23ページ参照）のご遺族の方のクルマで石巻駅近くまで送っていただいた。

その後、私たちは石巻の助成対象である「ISHINOMAKI 2.0」の事務所を訪問。あたたかいコーヒーをいただきながら少し言葉をかわしたあと、そこを早々に失礼し、夜になる前にとあわててタクシーを拾い、市内を広く見渡せるという「日和山公園」へと急いだ。海寄りの地区を少し歩いてまわりたかったのだが、すでに駆け足で日は落ちはじめていたので、この高台に位置する公園で沿岸部を眺めながら、しばらく当時のことに想いをめぐらせることにした。

瞬く間に景色は暗い夜の底に沈んでしまい、私たちはせめてもの思いで、その闇の向こうに届くようにと再生と復興への祈りの念をおくり、石巻駅で再び高速バスに乗るためにその場をあとにした。暗くなった空で、ほぼ真ん丸に輝く月が私たちを見送ってくれた。（I.I.）

「私のまなざし」5

ボジョーとの再会の約束

～停戦から和平への道を探るビルマ

文・写真◉宇田有三
2006年度研究助成プログラム助成対象

タイ第二の都市チェンマイの屋台で、カレン人のボジョーと再会したのは二〇〇五年十月だった。ボジョー(49)と私は同年同月生まれで、彼は私より六日早く生まれたお兄さんである。彼は、カレン人といってもタイ・カレンではなく、生粋のビルマ・カレンである。

彼と初めて会ったのは二〇〇〇年十二月、ビルマ・カレン州の奥深い山の中であった。彼は滅多に山から下りてこない。それがその時、何かの用事でチェンマイに来ていた。Tシャツにジーンズ姿で日本食の屋台に座ったボジョーは、初めて食べる日本食に慣れない箸を使い、一見すると北タイのどこにでもいる普通のオジサンである。だが彼は、ビルマ(ミャンマー)の軍事政権(当時)が最も警戒する「カレン民族解放軍(KNLA)」第五旅団の司令官でもあった。

東南アジア最後の軍事独裁国家ビルマは二〇一一年三月、新大統領に就いたテインセイン(67)のもと「民政移管」を果たした。国際社会は、矢継ぎ早に政治・経済改革を進めるテインセイン新大統領を後押し、ビルマを有望な投資先として歓迎している。

しかし、テインセイン大統領の改革は、当然、急激な変化を望まない軍の保守派からの抵抗もあった。だが、その抵抗を一気に打ち破ったのが、二〇一二年一月十二日の「カレン民族同盟(KNU)」との歴史的な停戦である。

タイ国境が近いビルマ東部カレン州を舞台に、ビルマ国軍とKNUの軍事部門であるKNLAとの紛争は、ひとつの国の中で続く内戦として世界最長であった。それが戦闘開始から六二年十一か月目、ようやくカレン州内で銃火が止んだ。それはテインセイン大統領の強い指導力でもあった。

政府内の保守派は、ミンコーナイン氏など著名な政治囚や自宅軟禁中のキンニュン元首相の恩赦に強く反対していた。だが、KNUとの停戦の翌十三日、大統領名で恩赦は実行された。テインセイン大統領の権力基盤が固まったのは、この時だと私は推測する。

ビルマ政府が変化するなか、KNU側も改革に迫られている。八年前の二〇〇四年、当時の軍政と和解交渉を始めたのは、KNUではなくKNLAの元総司令官ボーミャ将軍だった。長く続いた内戦のため、彼らの組織も事実上軍部がほぼ全ての実権を握っていた。その交渉はキンニュン首相の失脚で不発に終わる。今回の停戦交渉を率いたのは、セポラセインというKNUの女性書記長だった。

KNU内部には大きく二つの勢力がある。テインセイン大統領を信頼し、〈停戦から一気に和平合意へと向かう派〉と〈新政府との間の停戦が遵守されるのか見極めたうえで、徐々に和平合意の話し合いを進めていく派〉である。実は、一気に和平合意を進めようとしているのはKNLAの総司令官派で、セポラセインは慎重な態度をとっている。もしここで舵取りを誤れば、KNUが支配する地域は経済的な利権だけを追求する勢力にカレン人が支配されてしまう。セポラセインは、そう危惧するのだ。

ボジョーは、性急な和平合意には反対である。KNLAも一枚岩ではない。KNLAの総司令官が管轄する第六・第七旅団の戦闘はビルマ・カレン州内で続いていた。だが、旅団幹部たちの日常生活は事実上、タイ側の町にあった。ジャングルではない町の暮らしは利便な生活の恩恵に浴して、ゲリラ幹部の士気も鈍っていた。そのうえ、タイ政府や国際NGOからの圧力(説得)で、ビルマ新政府との停戦を迫られていた。

一方、戦闘も生活基盤の場所も山奥にあるボジョーの第五旅団は、絶えずビルマ国軍の脅威にさらされていた。歴史的な停戦の後も、「敵側」の兵士は依然として目の前に存在している。そのため、自分たちの暮らしは自分たちで守るという意識が極めて強い。

「自分が武器を取った一番の理由は、カレンの人びとをビルマ軍の暴力から守りたい、それだけなんだ。カレン人のためだったら、何でもする覚悟だ」

ボジョーがいつも口にする言葉だ。

当初、英単語を並べただけの彼の会話力は、会う度に上達していた。

「山の中で銃を取っていただけでは指導者として充分ではない。もっと勉強して世の中のことを知らなければならないんだ」という。

二〇一〇年、第五旅団の兵站基地を訪れた。旅団司令官としては質素な彼の小部屋には、英語の原書が所狭しと並べられていた。「カレン人のためだったら、何でもする」とは、武力闘争だけを意味しているではないのは明らかだった。

二〇一二年四月の訪問の際には、それら英語の原書が全て姿を消していた。驚く私に彼が見せたのは、iPadであった。山の中でインターネット接続はどうするのか。ゲリラの司令官に聞くには野暮な質問である。

ビルマとタイを分かつサルウィン河(右:ビルマ、左:タイ)。この大河を見続けて21年、風景は変わらない。だが、あと数年でこの下流にダムが造られると、様子は一変するだろう。

ビルマ国軍との戦闘が続く最前線の村。村の学校に通う子どもたちに声をかけるボジョー。(2001年)

兵站基地にて部下の兵士に指令を伝える。(2010年)

iPadを使って、歴史や軍事分析の英文資料を読むボジョー。(2012年)

「停戦から和平への流れについて、一連の交渉は全てビルマ政府の計画に沿ったものなんだ。我々、カレン側にとって、何が有利で何が不利なのか、急な展開でそれを検討する余裕もない。ビルマ政府の高官から直接会いたいという連絡も来ている。さて、どうしたものか、いろんな人に意見を聞いている」

政府側にとって、KNUとの和平合意への一番の障害は、武器を持って山の中でゲリラ活動を続ける最強の第五旅団の存在なのだ。

二〇一二年十月、KNLAの総司令官が解任された。KNUの許可なく、ビルマ政府と和平交渉を進めたというのが理由だった。解任された総司令官の後任に任命されたのが、ボジョーであった。いよいよボジョーが表舞台に登場するのか。私は期待と不安を胸に、日本でそれらのニュースに接した。

十一月半ば、解任されたKNLAの前総司令官が巻き返しを図り、KNUやKNLAの分裂かという情報も伝えられた。しかし、KNUの内紛はビルマ政府を利するだけだと、前総司令官は元の任に戻ることになった。この一文を書いている十一月末にも、KNUの代表者会議がビルマ辺境のカレン州で行なわれる予定である。

ボジョーとは、二〇一三年一月にも再会の約束をしている。彼が今、どんな思いでこの政治的な変動に身を置いているのか、次回改めて尋ねてみたい。

◉うだ・ゆうぞう(フォトジャーナリスト)
2006年度研究助成プログラム助成対象「『命』の尊厳を求めて――写真撮影を通して現代ビルマ(ミャンマー)の実態と今後を追う」

JOINT Café
ジョイント・カフェ

第2回［秋田］

スウィートマーケット

「JOINT Café」は、トヨタ財団の助成を受けられた方々を中心に、お互いの活動について、自由に語り合い、交流する場として企画しました。今回はその２回目。小雪の舞い散る秋田市内で開催いたしました。

２０１２年12月12日（水）秋田にて「第２回JOINT Café」を開催しました（第１回の様子は、本誌第10号に掲載していますので、関心のある方は当財団ウェブサイトをご覧ください）。「JOINT Café」は、トヨタ財団の助成プロジェクトが運営する全国各地の「コミュニティカフェ」で、当財団の助成を受けている方々を中心とした多様な人々が交流するイベントです。

今回は、秋田県内のみならず岩手県、宮城県からも参加者が集まり、21名でランチを食べつつ語り合うにぎやかな会となりました。

●

今回の会場となった「スウィートマーケット」は、２０１０年度地域社会プログラムの助成を受けて「地産地消を進める会」が実施している「安全な食で地域を支え合う『地域の食のコミュニティづくり』」プロジェクトに参加している自然食品・マクロビオティックのお店です。当日は、秋田県の野菜や雑穀を使ったマクロビオティックランチを皆で味わうことからスタートしました。

この「地域の食のコミュニティづくり」プロジェクトは、「食」を結節点にさまざまな課題に取り組む市民をつなぎ、問題解決と支え合いのネットワークをつくることを目的としています。

具体的には、秋田県内の有機農業者と消費者のつながりをつくること、課題解決に取り組む市民が出会う場としての「地域の食のレストラン」ネットワークをつくることが活動の二つの柱です。

新たに自前の「コミュニティカフェ」を立ち上げるのではなく、地域にすでにあるレストランやカフェのなかからプロジェクトの趣旨に共鳴するお店をつなぎ、そこを活動の拠点とし、人と人を結びつけるためのさまざまな交流イベントを開催します。地域のなかにすでにある資源（カフェやレストラン）を上手に活用することで、点ではなく、地域全体に面でのネットワークが生まれることが期待できるのです。

当日は、キックオフスピーチとして「地産地消を進める会」代表の谷口吉光氏よりプロジェクトについての紹介があり、その後参加者全員が自己紹介を兼ねたスピーチを行いました。

谷口氏は、「地域の食のコミュニティづくり」プロジェクトの他にも「衣」の地産地消をめざす「羊の学校プロジェクト」など秋田で「地産地消」、「自給的暮らし」を考える活動を継続して実施しています。秋田では、わずか数十年前まで各家で羊を飼い、その毛で毎年冬にセーターを編むといった暮らしが身近にあったそうです。それを聞いた参加者は、驚く人、うなずく人と、出身地や世代によって人それぞれ。私自身は、驚くと同時に、なんと贅沢な！とうらやましくも思いました。

「地産地消」、「自給的暮らし」の生活、今私たちは改めてそのことの意味、豊かさとは何かということを考えなくてはいけない時期にきている、という谷口さんからの問題提起。その問題提起を受けて、参加者全員がスピーチを行いました。

なごやかな
雰囲気のなかで、
さまざまな話題提供、活発な
意見交換が行われました。

参加者の取り組む活動は、農業、自殺防止、地域おこし、震災復興、市民活動支援等々と多様なものですが、地域に対する熱く、深いまなざし、活動に対する情熱が共通していたため、皆の発言が共鳴しあっていたように思います。

「東北には手間ひまをかけた、手づくりの文化が残っている、これからのライフスタイルにはそれが大切」「食も農業も生活も腹八分目」「小さな連携力が社会を変える」「食を通して命の大切さを考える」「新しく考えることはない。昔からの知恵のなかにすべて答えがある」といったこれからの暮らし方、生き方につながる言葉も多く、地域における一つ一つの活動のなかに、これからの社会の姿を考えるヒントがちりばめられていることを改めて感じました。

会の冒頭で「知らない人と隣合わせに座り、同じ料理を食べることで思わぬ深い話ができる」と谷口さんがお話されていましたが、その言葉を実感する会になったのではないかと思っています。

「JOINT Café」は一日限りのささやかなイベントですが、ここから生まれる新たなつながりが実り、少しでも社会を変えていく力に育っていくことを願っています。

（トヨタ財団　喜田亮子）

心豊かな暮らし、
よりよい社会を希求する
思いは誰もがいっしょです。

スウィートマーケット
Sweet Market

安全で安心な自然食品・マクロビオティックのカフェです。オーガニックにこだわった玄米菜食のランチやパスタを提供。女性客が多く、また、お弁当やパンの販売も行っています。

お車でお越しの際は周辺の有料駐車場をご利用ください。

［営業時間］10:00〜19:00
［定休日］日曜日

［TEL］018-853-0987
［URL］http://www.sweet-market.com/

〒010-0001
秋田県秋田市中通６丁目4-28

THE TOYOTA FOUNDATION
トヨタ財団ジャーナル
January 2013

REPORT

アフリカにおけるアジアワークショップ

◉峯 陽一
（みね・よういち）
同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授。主著に『南アフリカを知るための60章』（明石書店）などがある。

トヨタ財団の助成分野の一つに、アジア研究があります。助成対象者は主にアジア人ですが、今回、このアジア研究を、アジアの存在感が増しているアフリカで育てていくためのワークショップ開催に対して、その先見性と重要性に鑑みて、2012年度のイニシアティブプログラムで助成しました。

同会議の主催者の中心は、これまでアフリカの知の生産をリードしてきたヨーロッパ諸国の一つであるオランダの研究機関でしたが、招待された会議参加者の多くはアフリカとアジア諸国の研究者でした。当財団は同会議への日本からの参加者に対し旅費を助成し、その中の一人、峯陽一氏より会議についてご報告いただきました。

アフリカの教育の課題として一般に想像されるのは、「子どもたちを小学校に行かせよう」、「校舎を建ててあげよう」といったことだろう。それも大切だが、アフリカ諸国には名門の国立大学が存在している。私立大学も次々と設立されて、困難な状況のもと、国の未来を舵取りしていく人材を生み出している。

しかし、アフリカの教育カリキュラムは欧米偏重であり、アジアを研究する教員や大学院生はけっして多くない。近年では、アフリカ各地に孔子学院が設立され、中国に留学する若者が増えてきた。だが、中国語以外のアジアの言葉や文化を身につけ、アジアの政治経済全般を深く理解するアフリカ人というと、数えるほどしかいないのが現状である。日本に留学して科学技術を学んだり社会科学一般を学ぶアフリカ人は多いけれども、それだけでいいのだろうか。

2012年10月9～11日、ザンビアの首都ルサカの郊外で国際ラウンドテーブル「アフリカにおけるアジア研究」が開催され、アフリカを中心に17カ国から30名の研究者が参加した。主催はザンビア大学とオランダの複数の教育機関。トヨタ財団の支援を受けて、日本からも小生に加えて、南アフリカでアジアの国際関係を教えているスカーレット・コーネリッセン教授（現在、アジア経済研究所客員研究員）、そして、ケニア出身で大阪在住の経済学者ナタニエル・アゴラ博士が参加した。

ザンビアで行われたラウンドテーブルの様子

ラウンドテーブルでは、アフリカにおいてアジア研究を推進する意義を確認した後、各国の現状が報告された。そして参加者たちは、潜在的なニーズを探りつつ、これから必要なアクションについて活発に討論した。

アフリカとアジアの教育研究機関は多面的な協力関係を発展させ、アジアの言語教育を推進し、留学制度を拡充し、教育カリキュラムを協働で開発し、インターネット空間を利用して教材・研究資料を提供していくべきである。人文学、社会科学、政策科学のすべてにわたって、両地域を結ぶ共同研究を呼びかけ、研究者の交流を進め、適切なテーマのもとで国際会議を開催していくことも大切である。

こうした構想を具体化させるために、ラウンドテーブルでは、「アフリカにおけるアジア研究協会」（Association of Asian Studies in Africa）を設立することが決まり、8人の運営委員が選出された。

運営委員は、4名のアフリカ人研究者に加えて、アジアからは中国（北京大学の劉海方教授）と日本（私）、そしてヨーロッパ、アメリカの研究者で構成される。そこで今後5年間の活動計画を策定し、2013年にはマカオで運営委員会、2014年にはガーナで「アフリカから見たアジア」をテーマに第1回大会を開催することになった。

さらに、姉妹組織として「アジアにおけるアフリカ研究協会」（Association of African Studies in Asia）の結成を目指すことになり、小生と中国、韓国、インド、インドネシアのアフリカ研究者の間で、電子メールで活発な意見交換が始まった。

今回のラウンドテーブルの中心はザンビア大学のベトナム研究者ウェビー・カリキティ教授であるが、オランダ・ライデン大学国際アジア研究所のフィリップ・ペイカム博士も大きな役割を果たした。小生が所属する同志社大学はザンビア大学と提携し、積極的に学生を交換しながら、アジアの拠点のひとつとして活動していく予定である。

ラウンドテーブル参加者による記念撮影

高等教育のネットワーキングを通じて、アジアとアフリカを「面と面」でつなげていくこと、そして、アフリカの人々が単なる「研究対象」ではなく、知識の「共同生産者」として主体化していくプロセスを促進することが、このプロジェクトの究極の目的である。うまくいけば、百年後の世界に向けて、世界の地域に関する知の枠組みを根本から組み替えることになるだろう。

1955年にインドネシアで開催されたバンドン会議（アジア・アフリカ会議）の精神を引き継ぎ、ネットワークを着実に育てていきたい。その拠点のひとつとして、日本の民間機関の貢献が大いに期待されていることを実感し、身が引き締まる思いである。

INFORMATION

アジア隣人プログラム・研究助成プログラムの助成金贈呈式を開催

2012年度アジア隣人プログラムは、国際支援のあり方を見直すための準備期間と位置づけ、1年限定の特別企画として「未来への展望」をテーマに公募を行いました。106件の応募をいただき、選考委員会による選考を経て、19件4980万円の助成が決定しました。

研究助成プログラムは、「よりよい未来を築く知の探究」というテーマのもと公募を行いました。「共同研究助成」385件、「個人奨励助成」495件の合計880件の応募をいただき、選考委員会による選考を経て、「共同研究助成」は13件6710万円、「個人奨励助成」は21件2799万円の助成が決定しました。

助成金贈呈式は2012年10月23日にハイアットリージェンシー東京にて開催し、「助成対象者OB・OG報告会」、「助成金贈呈式」の二部構成で実施しました。

報告会では、助成対象者OB・OG3名の方より、トヨタ財団の助成金を受けて活動を行い、その成果を高めていくためにはどうすればよいのかといったことについて、お話いただきました。

3名とも具体的な経験にもとづいた「助成金を活かす」ための「ノウハウ」を、簡潔かつわかりやすい見事なプレゼンテーションで発表してくださり、これからプロジェクトをスタートする助成対象の方々にとっても得るものが多かったようです。

第二部の助成金贈呈式では、遠山敦子理事長より挨拶があったのち、桑子敏雄（東京工業大

遠山敦子理事長により贈呈書が授与されました

桑子敏雄 研究助成プログラム選考委員長

学大学院教授）研究助成プログラム選考委員長より選考結果についてご報告いただきました。アジア隣人プログラムについては、委員長三好皓一立命館アジア太平洋大学大学院教授がご欠席であったため、当財団常務理事伊藤博士が代わって報告いたしました。

桑子委員長は、「プロジェクトとは、スタートがあってゴールがあるもの。アウトプットと同時にプロセスが大切である。しっかりとマネジメントして進めてほしい。また先例がほとんどないプロジェクトであれば予想外のリスクや予想外の成果もあると思うが、いずれもトヨタ財団としっかりとしたコミュニケーションをとって進めてほしい」とお話されました。

アジア隣人プログラムの助成対象を代表してあいさつをされた伊藤道雄さん（ACC21代表理事）は、参加者への提言として「助成金は社会変革のための資金。社会を変革していこう、そしてここに集まった皆でもう一つのアジアを作っていきましょう。また、第三セクター（市民セクター）は、人と人のつながりです。第三セクターが、第一セクターといわれる日をめざそう」とお話されました。

国境を越えた人と人のつながりが引き起こす社会変革の力に大きな期待を抱きます。助成を受けた方々とともに、その実現に向けて歩んでいくことができればと思います。

東日本大震災対応「特定課題」＜冬助成＞の助成金贈呈式を開催

2012年度東日本大震災対応「特定課題」は、＜夏助成＞と＜冬助成＞、年2回の公募を実施しました。

今回助成が決定した＜冬助成＞では、「活動助成」と「地域間連携助成」の2つの枠組みで公募を行い、「活動助成」121件、「地域間連携助成」24件、合計145件の応募をいただきました。

選考委員会による選考を経て、当財団理事会にて「活動助成」20件4350万円、「地域間連携助成」5件2690万円の助成を決定しています。

助成金贈呈式は、2012年12月17日に福島県福島市、12月18日に宮城県仙台市、12月19日に岩手県遠野市で開催しました。

はじめに当財団プログラムアドバイザーの渡辺元が、ご挨拶と選考に関して説明をしました。仙台会場では、同プログラム選考委員である小野川和延氏（海外環境協力センター）より、選考委員会による選後評について説明があり、その後渡辺より贈呈書の授与を行いました。続いて、参加者による助成対象プロジェクトについてのプレゼンテーションがありました。

小野川和延 選考委員

小野川選考委員は、「震災直後の去年は混乱の中にありながら、それぞれが手の届く範囲でもがきながら活動をしているという印象だったが、それがだんだん変化してきていて、語り継ぐ活動、子どもたちをエンカレッジする、コミュニティカフェなどでわだかまりを楽にする取り組みなど、未来を見据えて広く展開されるプロジェクトからの応募が増えたように感じる」と話されました。

また、「財団として限りあるリソースの中で、他の参考になり、またリードしていってくれるようなプロジェクトを選考したので、周りにインパクトを与え、波及効果をもたらすようなモデルになってほしい」と参加者を激励されました。

上から福島会場、仙台会場、岩手会場の各贈呈式参加者による記念撮影

トヨタ財団・パナソニック教育財団
「東日本大震災支援 共同プロジェクト」

子どもの居場所づくりと次世代の育成～2012年度 報告会を開催

挨拶をする当財団遠山理事長（パナソニック教育財団理事長兼務）

トヨタ財団ならびにパナソニック教育財団は、東日本大震災で被災した子どもたちの支援と、コミュニティ全体で子どもたちを守り育てる場作りのために、共同助成プログラムを実施しています。

このプログラムでは、岩手県、宮城県、および福島県において活動している団体の、「子どもの居場所づくりと次世代の育成」に向けた取り組みへ支援を行っています。

2012年度は一般社団法人 子どものエンパワメントいわて（岩手県）、特定非営利活動法人「人間の安全保障」フォーラム（宮城県）、特定非営利活動法人 ビーンズふくしま（福島県）の3団体のプロジェクトに助成をしています。

2012年11月27日、TKP仙台カンファレンスセンターにて開催した報告会では、助成対象3団体のほか、東北地域内外から50名の方にお集りいただき、「活動報告会」、「パネルディスカッション」の二部構成で実施しました。

第一部の活動報告では、3つのプロジェクトから活動の様子と直面している課題、今後の展望についてお話いただきました。

第二部は、日本福祉大学村上徹也教授のコーディネートのもと、各プロジェクトから、学習支援ボランティアに参加している学生、運営団体の代表と各2名ずつが登壇しました。

今回ご報告いただいた3つの活動は、被災地に限らず、子どもの育ちをどう支えていくのか、子どもの声をどう社会に反映させていくのか、日本全体にとって大きなヒントとなるのではないでしょうか。そのためにも、個々の地域での取り組みをどう社会全体で世代を超えて共有していくかというのが今後問われていきそうです。

＊当日使用した資料や映像をウェブサイトにて公開しています。

BOOKS

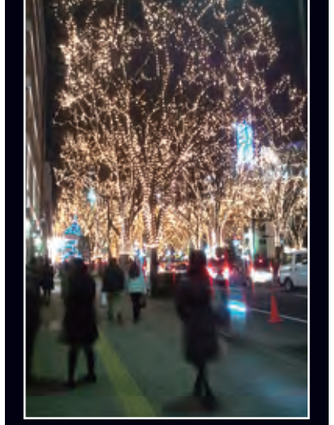
バリ島に生きる古文書
ロンタール文書のすがた

- 編訳：吉原直樹・中村潔・長谷部弘
- 発行：東信堂
- 発行日：2012年3月20日
- 価格：5,000円＋消費税

本書は、2009年度アジア隣人プログラム特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」による助成プロジェクト「バリ島に残存するヒンドゥー法典『アウィグ＝アウィグ』の収集・整理と保存・継承――伝統文書の比較歴史社会学的解読と再定位の試み」の成果として刊行されました。

本プロジェクトでは、インドネシア・バリ島にあるロンタール（ヤシの葉）博物館に所蔵されているヒンドゥー慣習法典『アウィグ＝アウィグ』の収集と解読を行いました。本冊子には、その『アウィグ＝アウィグ』の一部を日本語、インドネシア語、バリ語に翻訳し、解説を加えたものが掲載されています。

巻頭には、「現在に生きる古文書としてのバリ・ロンタール文書――日本の近世村文書との比較から」（長谷部弘著）、「バリにおけるロンタール（貝葉文書）とアウィグ＝アウィグ」（中村潔著）という解説文が掲載されており、専門外の人でも文書の持つ意味が理解できる内容となっています。また、文書のオリジナル画像も掲載されています。



イルミネーションに飾られた仙台の街を散策する［Y.N.］

［編集後記］
LAST WORD

●昨年の秋から冬にかけて、助成対象の方々にお集まりいただく機会がたくさんありました。本誌でも紹介させていただいた助成金贈呈式、JOINT Café、「未来への展望」キックオフワークショップ……。

ソーシャルネットワーキングサービスが次々と誕生し、インターネット上のネットワーキングが盛んですが、改めて顔を合わせて話すことの大切さを感じています。JOINT Café の際に、秋田の佐藤久男さん（NPO法人蜘蛛の糸理事長）が、「何かしらの目的を持って人が集まることもあるが、集まってみて何かが生まれることもある」とお話されていました。それぞれに多忙ななかで集まることに難しさもあると思いますが、顔を合わせて語り合う、そうした場を少しずつつくっていければと思っています。2013年もよろしくお願いします。［R.K.］

●●昨年の2月頃から、日本と東南アジア各国を中心に、国際機関・助成組織・政府機関・研究者・NGO等の人と会って話を聞いてきました。現場の皆さんの言葉は僕の予想を上回るものでした。「我々は開発援助をやるために東南アジアにいるのではない」、「日本とアジア諸国の力関係は大きく変わっている」、「むしろ日本がアジアから学ぶべきことも多い」。これらの言葉は、日本にとっては心地よいものではないかもしれません。しかし、そのような時代になりつつあること、今後ますますその勢いが増していくであろうこと、それを念頭においた活動が、今後のトヨタ財団にも求められるように思えます。［K.A.］

●●●師走も下旬に差し掛かったころ、助成金贈呈式に出席するため、福島県と宮城県を訪れました。助成対象者の皆さんにお話を伺ったところ、震災から1年半以上が経過し、被災地や被災者を取り巻く環境は私が想像していた以上の速度で変化しているように感じました。本誌JOINTも時代の流れの中でニーズに合ったトピックをお届けできるよう、励んでまいります。本年もどうぞよろしくお願いいたします。［Y.N.］

●●●●セロニアス・モンクという黒人のジャズ・ピアニストをご存知でしょうか。本号のインタビューで取材した「カフェ・デ・モンク」のモンクは「僧（monk）」と「文句」の意味の他に、このセロニアス・モンクのモンクに掛けているということを、金田和尚さんが教えてくれました。私も昔からジャズが好きで、よくモンクを聴いていたのでうれしくなったものです。

それにしても、なぜここであのモンクなのか。モンクの演奏には簡単に言ってしまうと、かりにミストーンの一つや二つあっても気にしない、というか、そのはずれかたを逆に自分の音楽にとりいれてしまうような機知と鷹揚さがある。そこがなんともチャーミングなのです。優れたコンポーザーであり、バンド・リーダーでもあったモンクは、しかし、権威主義からはほど遠い存在だったのでしょう。競争とか進歩という概念に価値が置かれる現代、かつてそんなことに見向きもしない「ぼくのおじさん」みたいなモンクというミュージシャンがいたことには、なにか私をほっとした気持ちにさせてくれるものがあります。いまいちどモンクを聴き直してみたい、できればアナログのレコードで。［I.］

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT

ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいはファックスでご連絡いただけると幸いです。

JOINT［ジョイント］No.11

発行日　2013年1月30日
発行人　伊藤博士
編　集　トヨタ財団 広報グループ

発行所　公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
［TEL］03-3344-1701
［FAX］03-3342-6911
［URL］http://www.toyotafound.or.jp/

編集協力　石井 泉
デザイン　エディション・ヌース
印刷　文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

On The Journey ●旅の途上で

石井 泉（本誌編集スタッフ）

Photo by Izumi Ishii

宮城県石巻市にある日和山（ひよりやま）は標高約56メートルの低山です。3・11東日本大震災のとき、多くの市民がこの山に登って津波から避難したことで知られています。本号の取材の関連でほんの一時ではありますが、この山の公園に立ち寄りました。

暮れなずむ夕空の下、日和山公園から津波に襲われた市の沿岸部を一望しました。夜の影に覆われんとする平地の向こうに太平洋が遠望できますが、そもそも日和山という名は港から商船が出港する際に、この山に登って天候を占う（日和る）習慣があったことから付けられたといわれています。ただ美しい風景を眺めるためだけに登る人も多かったそうですが、平安時代にまで遡るとされる神社がここに鎮座しているように、日和山はこの地域にとって昔からひとつの聖なる場（トポス）なのかもしれません。

公園を後にするときカメラを鳥居に向けて構えると、すっかり暗くなった空に月が美しく輝き、地上を煌々と照らしていました（関連記事は25ページを参照）。

公益財団法人
トヨタ財団
THE TOYOTA FOUNDATION

http://www.toyotafound.or.jp/

JOINT No.11

JOINT No.11 公益財団法人 トヨタ財団 〒163-0437 東京都新宿区西新宿 2-1-1 新宿三井ビル 37 階